

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター発掘調査報告書第74集

お こ う じょう あと
岡 豊 城 跡

国分川激甚災害対策特別緊急事業に伴う発掘調査報告書

2002年

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

お こ う じょう あと
岡 豊 城 跡

2002年

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

香長平野は物部川と国分川により形成された広大な平野であり、古代より様々な恩恵を人々に与え、豊かな文化を育んできました。弥生時代では西日本でも屈指の規模を誇ります田村遺跡群があり、律令期には国衙がおかれるなど、政治的にも文化的にも土佐の中心地としての役割を担ってきました。

今回報告いたします岡豊城跡は四国の雄、長宗我部氏の居城として有名です。発掘調査は僅かな面積でしたが、岡豊城の再評価に繋がる重要な成果を得ることができました。この報告書により一人でも多くの方が埋蔵文化財に対して興味・関心を持っていただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に際しまして高知県河川課及び高知県南国土木事務所の埋蔵文化財に対する深い御理解と御協力を賜ったことに心から謝意を表するとともに、調査報告書作成では関係各位の皆様にも多大な御指導並びに御教示を頂いたことに厚く御礼申し上げます。

平成14年6月

財団法人 高知県文化財団 埋蔵文化財センター
所長 島内 靖

例 言

1. 本書は、国分川激甚災害対策に伴う岡豊城跡の発掘調査報告書である。
2. 岡豊城跡は高知県南国市岡豊に所在する。
3. 調査は、高知県河川課・高知県南国土木事務所の委託を受け、高知県文化財団 埋蔵文化財センターが実施した。
4. 調査期間
試掘調査 平成12年12月18日～平成13年3月8日
本調査 平成13年7月25日～平成13年11月25日
5. 調査面積
試掘調査 約90m²
本調査 約1,300m²
6. 調査体制
 - (1) 調査担当
重森勝彦(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター 調査課長)
松田直則(同 第五班長)の指導のもと以下の体制で調査を実施した。
試掘調査 久家隆芳(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター 調査員)
本調査 今田 充(同 主任調査員)
久家隆芳(同 調査員)
上田健司(同 測量補助員)
 - (2) 総務担当
島内信雄(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター次長兼総務課長)
山本三津子(同 主任)
中城英人(同 主幹)
7. 本書の執筆は松田・今田・久家が分担し、遺物写真撮影・編集等は久家が行った。
8. 現地調査及び本報告書を作成するにあたり、池田誠(中世城郭研究会)、中井均(滋賀県米原町教育委員会)、吉成承三氏・浜田恵子氏((財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター)をはじめ(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センターの諸学兄に御指導・御教示を賜った。記して感謝する次第である。なお、池田誠氏には第 章掲載の縄張り図(Fig.39)を作成して頂いた。
9. (1) 発掘現場作業員
猛暑を厭わず作業に従事して下さった皆様に対し、記して感謝の意を表したい。
今村重臣・大石善久・大久保敦子・大久保雅子・岡田 晃・尾崎定富・尾崎定子・
河村美佐子・窪田美代子・酒井 岳・末政則幸・末政淑子・杉本直助・竹内 保・田代
勝・土居一彦・土居 豊・松井恵子・森 栄美・森尾 導・山本栄子

(2) 整理作業員

黒岩佳子・飯田 緑・大谷亜紀子・橋田美紀・秦 芳子・宮地佐枝・松井恵子・森 栄美

10. 出土遺物については試掘確認調査は「00-9NOC」、本調査は「01-9NOC」と注記し、関連図面・写真等とともに高知県文化財団 埋蔵文化財センターで保管している。

目 次

序・例言

目次・挿図目次・Tab.目次・写真図版目次

第 章 遺跡周辺の地理的・歴史的環境（今田）

- (1) 地理的環境 1
- (2) 歴史的環境 2

第 章 調査に至る経過と調査の方法（久家）

- (1) 調査に至る経過 5
- (2) 調査の方法 5

第 章 調査成果（久家）

- (1) 試掘調査 7
- (2) 調査概要 7
- (3) 基本層序 8
- (4) 検出遺構 16
- (5) 出土遺物 24

第 章 まとめ（久家）..... 33

第 章 考察（松田）..... 37

遺物観察表

写真図版

報告書抄録

挿図目次

Fig. 1	南国市位置図	1
Fig. 2	調査地点位置図	1
Fig. 3	岡豊城跡周辺の遺跡	3
Fig. 4	検出遺構全体図・グリッド配置図	6
Fig. 5	試掘確認トレンチ位置図	7
Fig. 6	試掘確認トレンチTR 1・TR 2 土層柱状図	8
Fig. 7	セクション 1	9
Fig. 8	セクション 2	10
Fig. 9	セクション 3	11
Fig.10	竪堀 2 平面図・エレベーション図	12
Fig.11	礫集中 1 平面図・断面図	13
Fig.12	柱穴列平面図・エレベーション図	14
Fig.13	掘立柱建物跡平面図・エレベーション図	14
Fig.14	堀切 1 平面図	15
Fig.15	堀切 1 断面図	16
Fig.16	土橋 1 平面図・断面図	17
Fig.17	土橋 2 平面図・断面図	18
Fig.18	礫集中 2 平面図	18
Fig.19	礫集中 3 平面図・立面図	19
Fig.20	焼土跡 1 平面図・断面図	19
Fig.21	礫集中 4 平面図	20
Fig.22	石列 1 平面図・立面図	20
Fig.23	横堀平面図・断面図	21
Fig.24	土師質土器実測図	22
Fig.25	瓦質土器実測図 1	23
Fig.26	瓦質土器実測図 2	24
Fig.27	備前焼実測図 1	25
Fig.28	備前焼実測図 2	26
Fig.29	土師質土器・土師器・陶器・土製品実測図	27
Fig.30	貿易陶磁器実測図	28
Fig.31	須恵器実測図	29
Fig.32	櫛・銅銭 実測図・拓影	30
Fig.33	鉄製品実測図	30
Fig.34	石製品・瓦 実測図・拓影	31
Fig.35	近世陶磁器実測図	32
Fig.36	遺構変遷図	34
Fig.37	伝家老屋敷曲輪表採遺物実測図	36
Fig.38	岡豊城跡縄張り図の変遷	38
Fig.39	岡豊城跡縄張り図	40

Tab. 目次

Tab. 1	器種別出土遺物点数	33
--------	-----------------	----

写真図版目次

PL. 1	調査区遠景 調査区近景
PL. 2	調査前風景 曲輪 3 完掘状況
PL. 3	曲輪 1 掘立柱建物・竪堀 2 完掘状況 曲輪 1 P 3・P 4 完掘状況
PL. 4	土橋 1 検出状況 土橋 1・2 南面状況
PL. 5	土橋 2 検出状況 土橋 2 北面状況
PL. 6	堀切 1 完掘状況 同上
PL. 7	堀切 1 bb'セクション 曲輪 1 礫集中 1 検出状況
PL. 8	竪堀 1 完掘状況 石列 1 検出状況
PL. 9	段状遺構検出状況 曲輪 3 焼土跡検出状況
PL.10	横堀完掘状況 横堀セクション
PL.11	石垣 2 検出状況 礫集中検出状況 P 3 完掘状況 P 6 完掘状況 土師質鍋出土状況 土師質土器出土状況
PL.12	出土遺物
PL.13	出土遺物
PL.14	出土遺物
PL.15	出土遺物
PL.16	出土遺物
PL.17	出土遺物

第 章 遺跡周辺の地理的・歴史的環境

(1) 地理的環境 (Fig. 1 ・ 2)

岡豊城跡の所在する南国市は、高知県のほぼ中央部にあり高知市に東隣し、吉川村、野市町、土佐山田町、本山町、土佐町、土佐山村と接している。香長平野の大部分を占め四国山地、太平洋、物部川に囲まれた県下第2の都市（人口）である。恵まれた自然と環境を生きし農業が盛んな田園



Fig. 1 南国市位置図

地域でもある。北部には四国山地がそびえ南部は平野部に分かれる。総面積125.35 で南北に細長い市域は「歴史の宝庫」といわれ県内でも遺跡数の多い地域である。県内最大の平野である高知平野は、太平洋に注ぐ物部川と浦戸湾に流入する国分川等の河川による扇状地と三角州により形成され、その東部は香長平野と呼ばれ県下有数の穀倉地帯がひろがる。平野部には、陣山、三畠山、坂折山、吾岡山等の標高100m

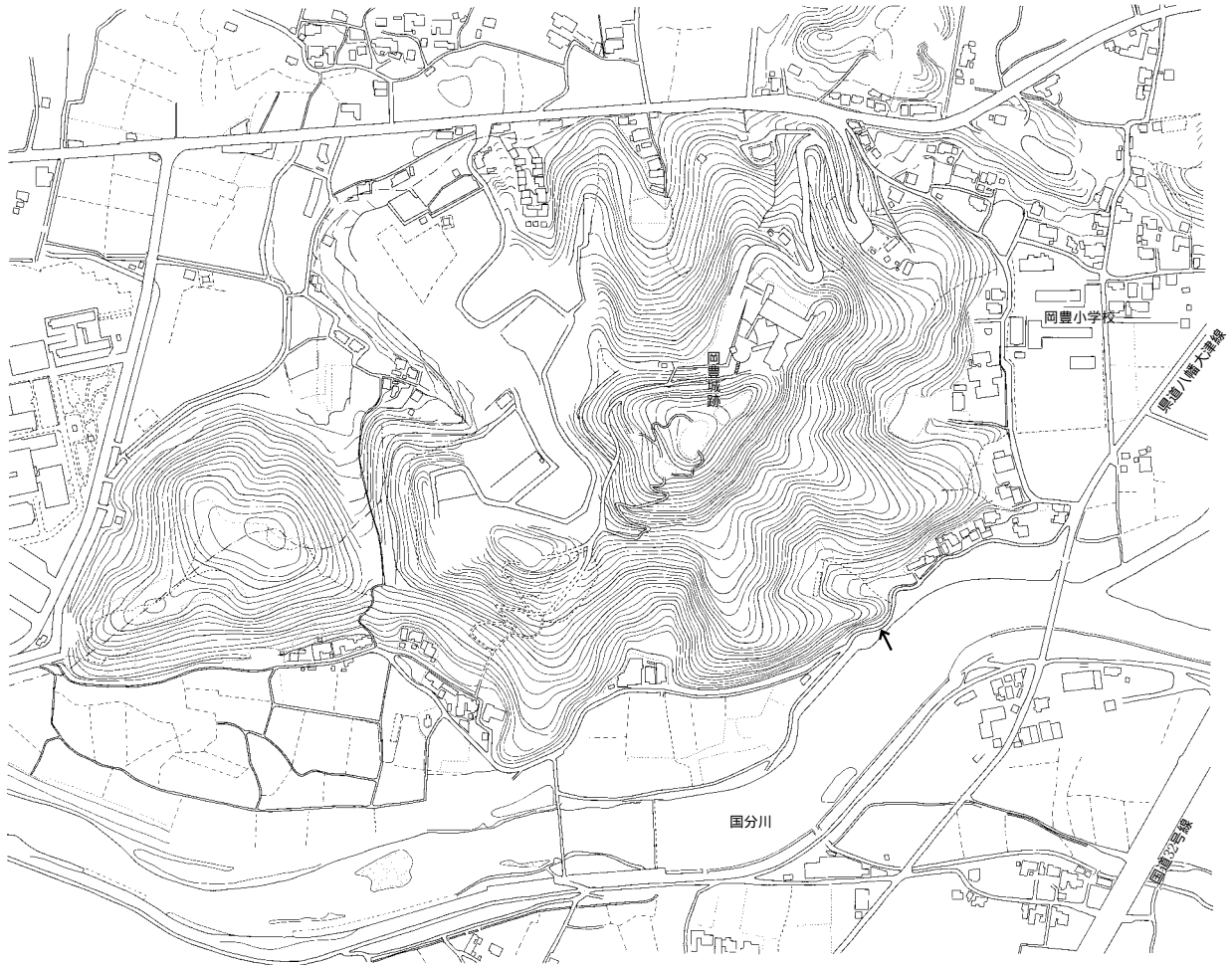


Fig. 2 調査地点位置図

前後の孤立丘陵が点在しており岡豊城跡のある岡豊山もこれらに含まれる。

長宗我部氏の居城として知られている岡豊城跡は、南国市北部の岡豊町八幡岡豊山に位置し香長平野に突き出した標高97mの東西に長い孤立丘陵である。山頂からは眼下に香長平野を見下ろし遠くに太平洋を一望することができる。東と南斜面にかけては比較的急峻であり笠ノ川川と国分川が東麓で合流し南麓を東から西へと流れ浦戸湾に流入する。河川交通の利便性と天然の堀としての役割を果たしていたと考えられる。北部は、現在は国道により分断されているが低い尾根伝いに四国山地へと連なっていたようである。西部には標高69mの伝説跡曲輪と呼称される小丘陵がつづき西麓は谷口であり当時は広範囲な湿地帯の存在が考えられやはり自然の要害となっている。

(2) 歴史的環境 (Fig. 3)

南国市は、県内でも遺跡数の多い地域であり中世までの土佐における最も重要な地域であった。岡豊城跡の所在する北部地域は国分川流域に土佐国府跡、比江廃寺、土佐国分寺等の遺跡が集中し、現在では「まほろばの里」としての街づくりが行われている。

旧石器時代の遺跡として岡豊町小蓮の奥谷南遺跡が存在する。細石刃、細石核、ナイフ形石器、スクレイパー、尖頭器等の遺物の出土により、これまで空白地帯と称された香長平野周辺部の旧石器時代の様相が明らかになるようとしている。

縄文時代の遺跡は四万十川流域に比べ少ないが奥谷南、栄工田、奥谷北等の遺跡が所在し奥谷南遺跡では、草創期の隆起線文土器・隆帯文土器が出土し中期末の貯蔵穴も検出され、栄工田遺跡では、後期から晩期にかけての土器が磨製石斧とともに出土している。

弥生時代の遺跡は、平野部で集中的に発見されており数多くの遺跡が展開している。田村遺跡群では、物部川の自然堤防上に初頭の集落跡が検出され弥生文化伝播の姿をみることができる。さらに前期の環濠に囲まれた集落と水田跡により集落と生産の場が確認されている。前期後半以降になると集落は拡散し平野部ばかりでなく山間部にも遺跡の立地が見られるようになる。田村遺跡群においては、中期から後期後半にかけても栄枯盛衰がありながらも集落は引き続き形成し香長平野における拠点集落の位置を占め、地形・環境に恵まれた生活の場として求められた土地であったと考えられる。後期になると北部の長岡台地上に移り竪穴住居址が多数検出された東崎遺跡のような集落が出現し各地に散在する。

古墳時代においても山麓部や孤立丘陵上で多くの後期古墳が分布している。小蓮古墳は、大型の横穴式石室をもつ円墳で22基の古墳からなる県下最大の群集墳である舟岩古墳群、4世紀から6世紀にかけて3時期の主体部が検出された長畝古墳群もこの地域に造営されている。香長平野北部を中心とする有力者の成立が考えられる。なお、岡豊城跡のある岡豊山にも古墳が点在しており須恵器、鉄製品等が出土しているようである。

古代の遺跡として、土佐国府跡、比江廃寺跡、土佐国分寺跡等が所在しており香長平野が政治・文化の中心地であることを示している。土佐国府跡は12次にわたる調査により掘立柱建物跡、溝、土溝等が検出されてはいるが、中心部の様相や政庁と見られる遺構は現在のところ未確認である。土佐国分寺跡では東側の土塁は寺域を示すと見られており現状変更に伴う調査及び伽藍配置確認の

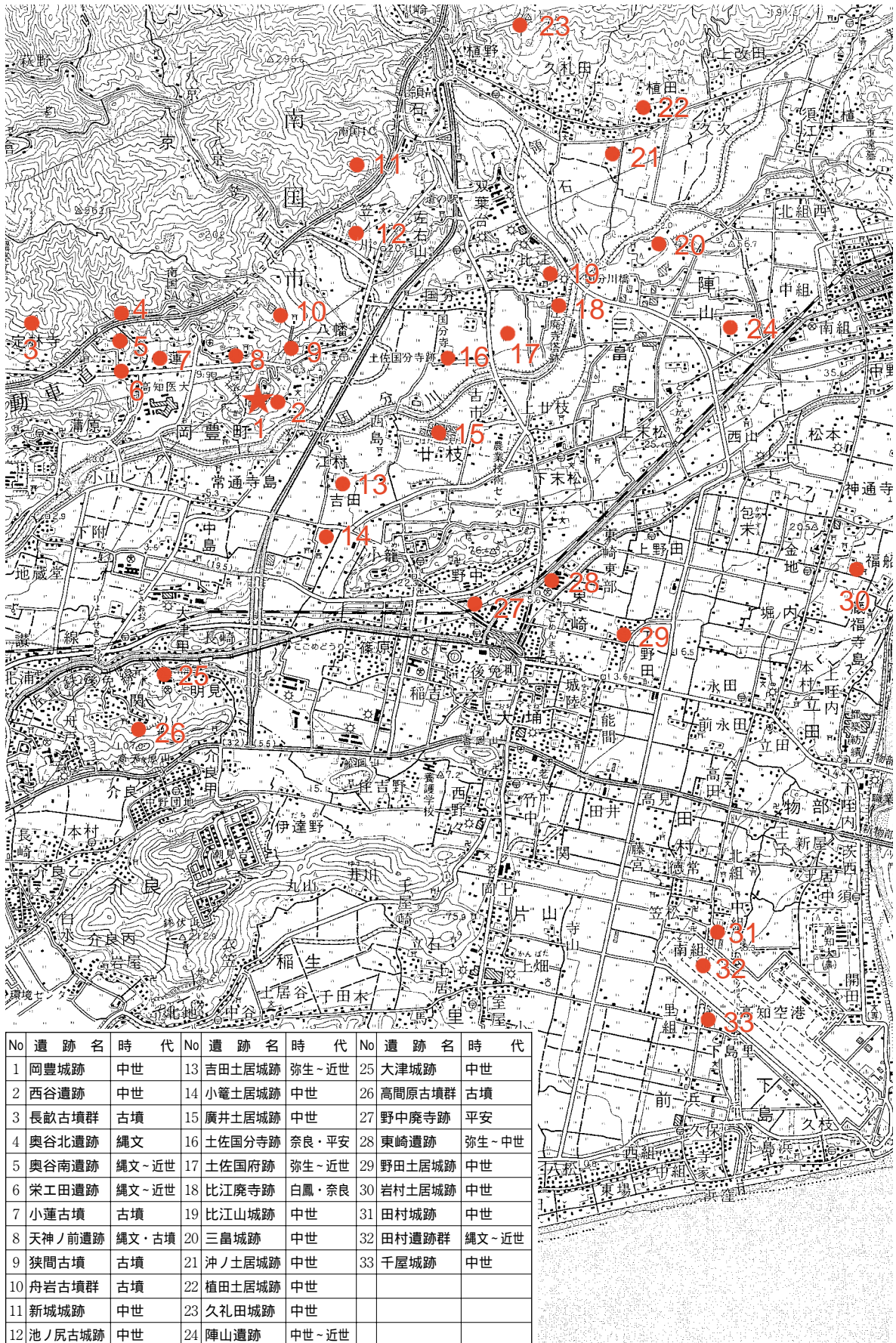


Fig. 3 岡豊城跡周辺の遺跡

ための調査では礎石建物跡、掘立柱建物跡が検出されている。比江廃寺跡は白鳳時代の寺院跡であり塔心礎が残されているが、伽藍配置、寺域については不明である。物部川下流域では、岩村遺跡の調査が実施され河川交通の拠点として旧物部川の川津としての性格を有し古代の津のあり方を知る貴重な事例が確認されている。

中世になると遺跡数も増加し平野部や周辺部に各城跡等の遺跡がほぼ全域に分布する。田村遺跡群の発掘調査では、溝に囲まれた建物群が31区画検出されており、細川氏が入国し田村城館が機能した時期とそれ以前、そして、長宗我部氏台頭の影響に伴って機能した時期の3時期に区分される。溝は、古代の条里制の影響を受けていたものと考えられ方向はほぼ同一で一辺30～50mの規模で区画され約半数では石組み等の井戸の存在がある。掘立柱建物跡は主屋と見られる大型の建物が数回の建替をもち検出されており周辺には小規模な掘立柱建物跡が付属している。政治・文化の中心として繁栄していた。田村城館跡は、土佐の守護代であった細川氏の居館であり3重の堀で囲まれた平城形式の複濠複郭式の城郭である。中世の城跡として、廣井土居城跡、千屋城跡、野田土居城跡、岩村土居城跡、久礼田城跡、新城城跡、三畠城跡、蚊居田土居城跡等の各城跡が所在している。現況では土塁等が残されているものは少ないが水田、畑等の地割に土塁、堀等の痕跡を見ることができる。南国市以外では中村城跡（中村市）、和田城跡（梶原町）、久礼城跡（中土佐町）、姫野々城跡（葉山村）、木塚城跡、芳原城跡（春野町）、浦戸城（高知市）等が調査されており戦国時代を中心とする城跡の資料が蓄積されている。

岡豊城跡は、県史跡整備に伴い6次の調査が行われ、詰、詰下段、三ノ段から礎石建物跡や土塁の内側に石垣が検出された。また、多量の土師質土器とともに青磁、白磁、染付の貿易陶磁器、瀬戸、備前、常滑などの国産陶器、銭貨、金属器等とともに「天正三年」（1575年）銘の丸瓦、懸仏が出土している。現在では、詰・詰下段、二ノ段、三ノ段の土塁や礎石建物跡などを復原し歴史公園として整備されている。

参考文献

『高知県の地名 日本歴史地名大系40』平凡社

『日本城郭大系 15香川 徳島 高知』新人物往来社

荻慎一郎他『高知県の歴史』山川出版社

森田尚宏 松田直則 1990年『岡豊城跡』高知県教育委員会

森田尚宏 1992年『岡豊城跡』高知県埋蔵文化財センター

三谷民雄 武地市義浩 西村直也 西山直利 1997年『岩村遺跡群』高知県南国市教育委員会

第 章 調査に至る経過と調査の方法

(1) 調査に至る経過

1998年9月、高知市周辺を集中豪雨が襲った。記録的な豪雨であり被害は甚大なものであった。特に高知市東部の被害は甚大であり、国分川・舟入川などの河川がオーバーフローし洪水が起こった。このため河川改修など洪水対策が実施されることとなり、国分川の河川改修計画地内に存在する岡豊城跡の一部において試掘確認調査を実施することとなった。

この結果をもとに南国土木事務所と協議を重ね、記録保存を目的とした発掘調査を実施することで合意した。平成13年5月16日付けで委託契約を締結し、(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。

(2) 調査の方法 (Fig. 4)

試掘確認調査の成果をもとに調査計画を立て、実施した。地形に即し、1辺4mのグリッドを設定した。杭名は東西方向は数字で、南北方向はアルファベットで表し、北西杭をグリッド名とした。出土遺物はこのグリッドを用いて取り上げた。

任意にセクションベルトを設定し、断面を観察しながら調査を実施した。すべて人力で掘削し、遺構及び遺物の検出に努めた。

また、必要に応じ、写真撮影及び公共座標をもとに実測を行った。空中撮影により風景写真を撮影し、遺構平面図を作成した。

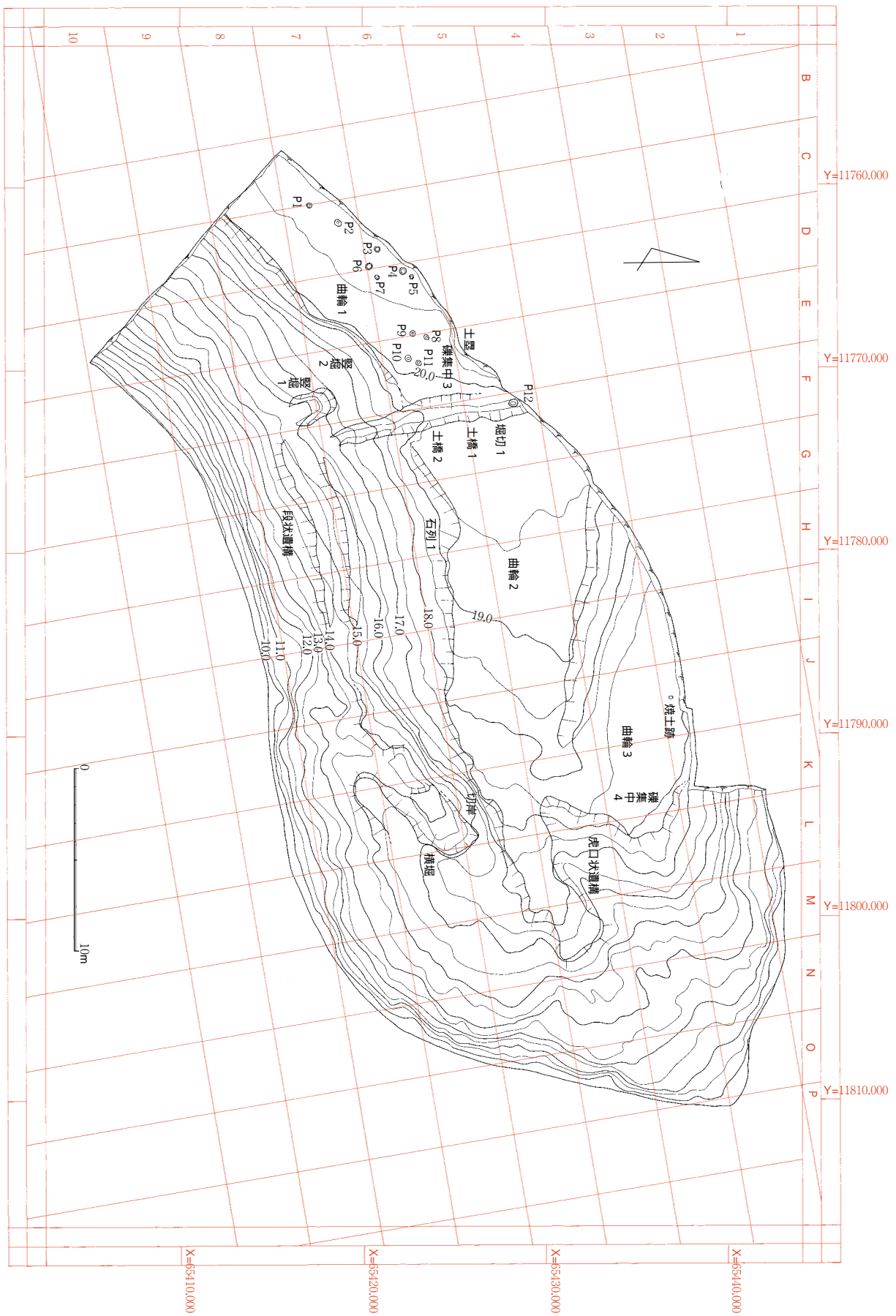


Fig. 4 検出遺構全体図・グリッド配置図

第Ⅲ章 調査成果

(1) 試掘調査 (Fig. 5・6)

試掘トレンチを12箇所設定した。TP 1とTP 2は河川敷き内、TP 3～12は丘陵部に設定した。その結果、丘陵部において岡豊城跡に関連する遺構・遺物を検出した。TP 1と2は、近年まで水田として利用されていた。耕作土、礫混じりの粘性度が強い粘質土を掘削すると地山の岩盤層である。両トレンチとも遺物・遺構は検出されなかった。

(2) 調査概要

今回の調査区は岡豊山の南東裾部にあたり国分川に接している。市道により山裾部は一部削平されている。一方、岡豊城跡からみると城跡の南東部であり、伝家老屋敷曲輪の入口部分に該当する。曲輪跡、堀切、土橋、竪堀、段状遺構、柱穴等を検出した。出土遺物は土師質土器、瓦質土器、国産陶器、貿易陶磁器等の岡豊城跡が機能していた15世紀から16世紀にかけてのものが大半を占める。その他、ごく僅かであるが古墳時代、古代、近世の遺物も出土している。

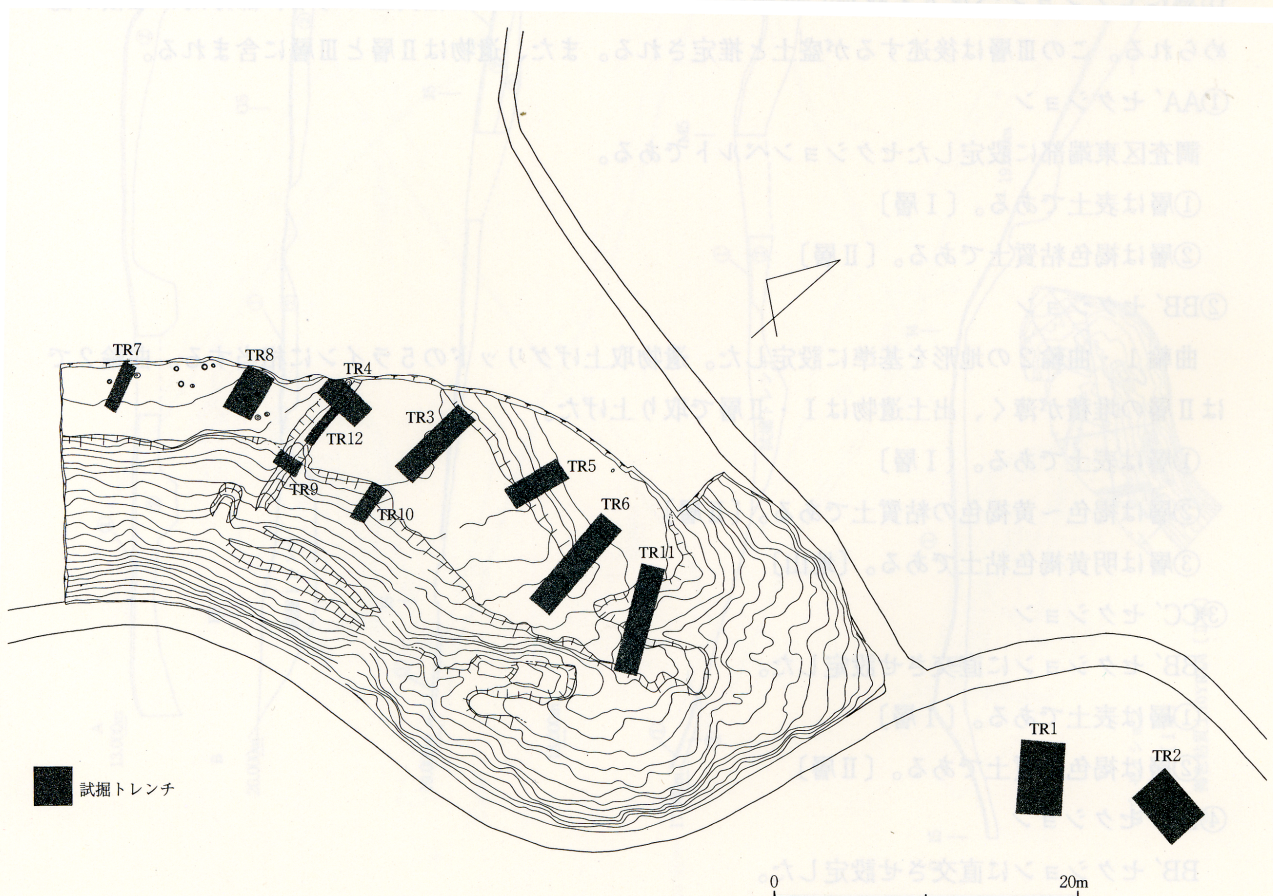


Fig. 5 試掘確認トレンチ位置図

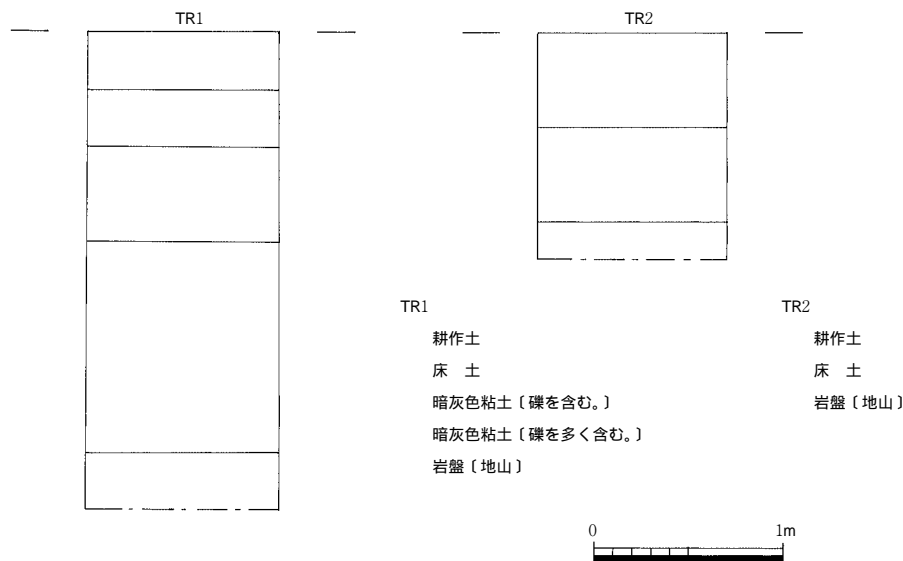


Fig. 6 試掘トレンチTR1・TR2土層柱状図

(3) 基本層序 (Fig. 7 ~ 9)

任意にセクションベルトを設定し堆積状況を観察した。全体的にみると土層は大きく ~ 層に分層できる。層は表土であり、層は褐色から黄褐色を呈した粘質土である。これら・層はほぼ調査区全域に堆積する。一方、層はにぶい黄褐色を呈した粘質土であり、部分的に堆積が認められる。この層は後述するが盛土と推定される。また、遺物は層と層に含まれる。

AA セクション

調査区東端部に設定したセクションベルトである。

層は表土である。〔層〕

層は褐色粘質土である。〔層〕

BB セクション

曲輪1・曲輪2の地形を基準に設定した。遺物取上げグリッドの5ラインに相当する。曲輪2では層の堆積が薄く、出土遺物は・層で取り上げた。

層は表土である。〔層〕

層は褐色～黄褐色の粘質土である。〔層〕

層は明黄褐色粘土である。〔地山〕

CC セクション

BB セクションに直交させ設定した。

層は表土である。〔層〕

層は褐色粘質土である。〔層〕

DD セクション

BB セクションに直交させ設定した。

層は表土である。〔層〕

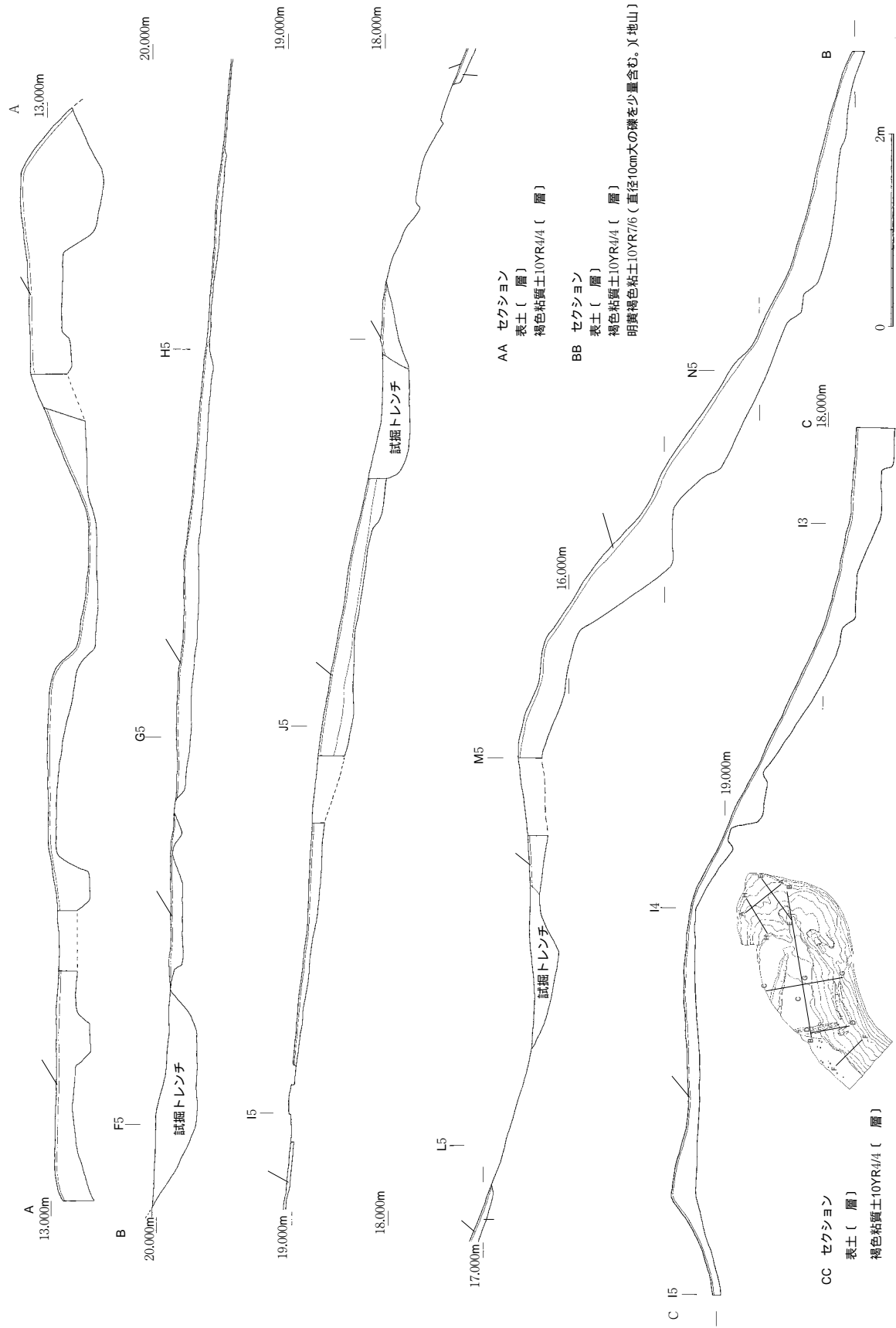


Fig.7 セクション1

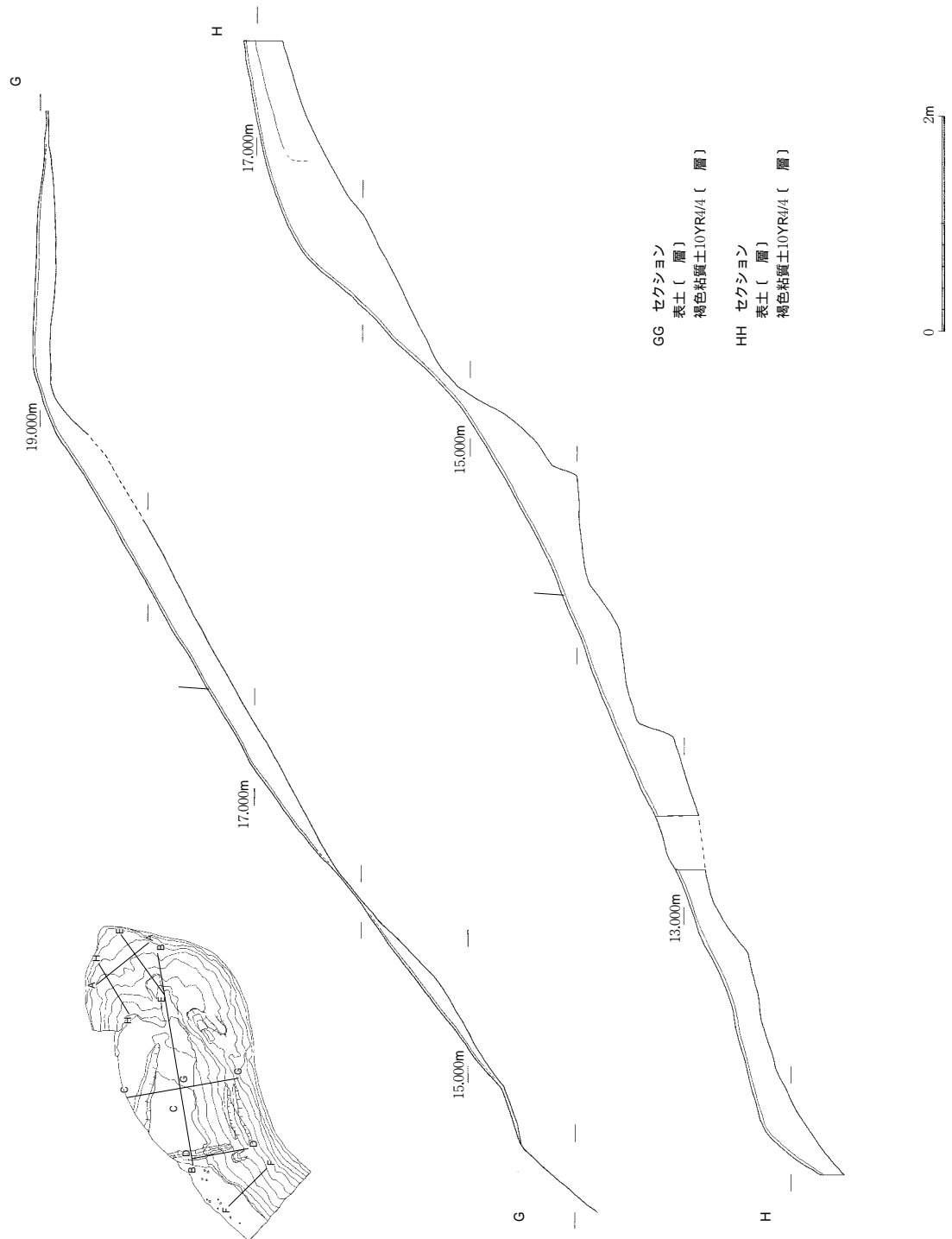


Fig.9 セクション3

層は黄褐色粘質土である。〔 層〕

層は明黄褐色粘土である。〔 層〕

EE セクション

地山のラインは一部に人為的に削平された可能性もあるが概ね自然地形である。

層は表土である。〔 層〕

層は褐色粘質土である。〔 層〕

FF セクション

曲輪 1 から南側斜面に設定した。 層は盛土と考えられる。 層は盛土の崩落層と推定される。

層は表土である。〔 層〕

層は褐色粘質土である。〔 層〕

層はにぶい黄褐色粘質土である。〔 層〕

層は褐色粘質土である。

層は黄褐色の礫層である。

層は黄褐色粘質土である。

GG セクション

BB セクションに直交させ設定した。

層は表土である。〔 層〕

層は褐色粘質土である。〔 層〕

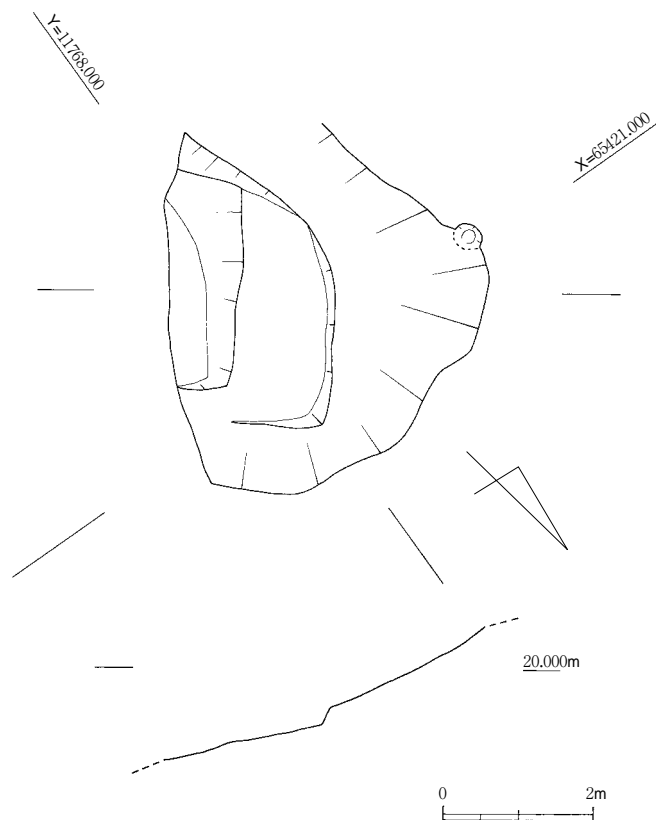


Fig.10 豎堀 2 平面図・エレベーション図

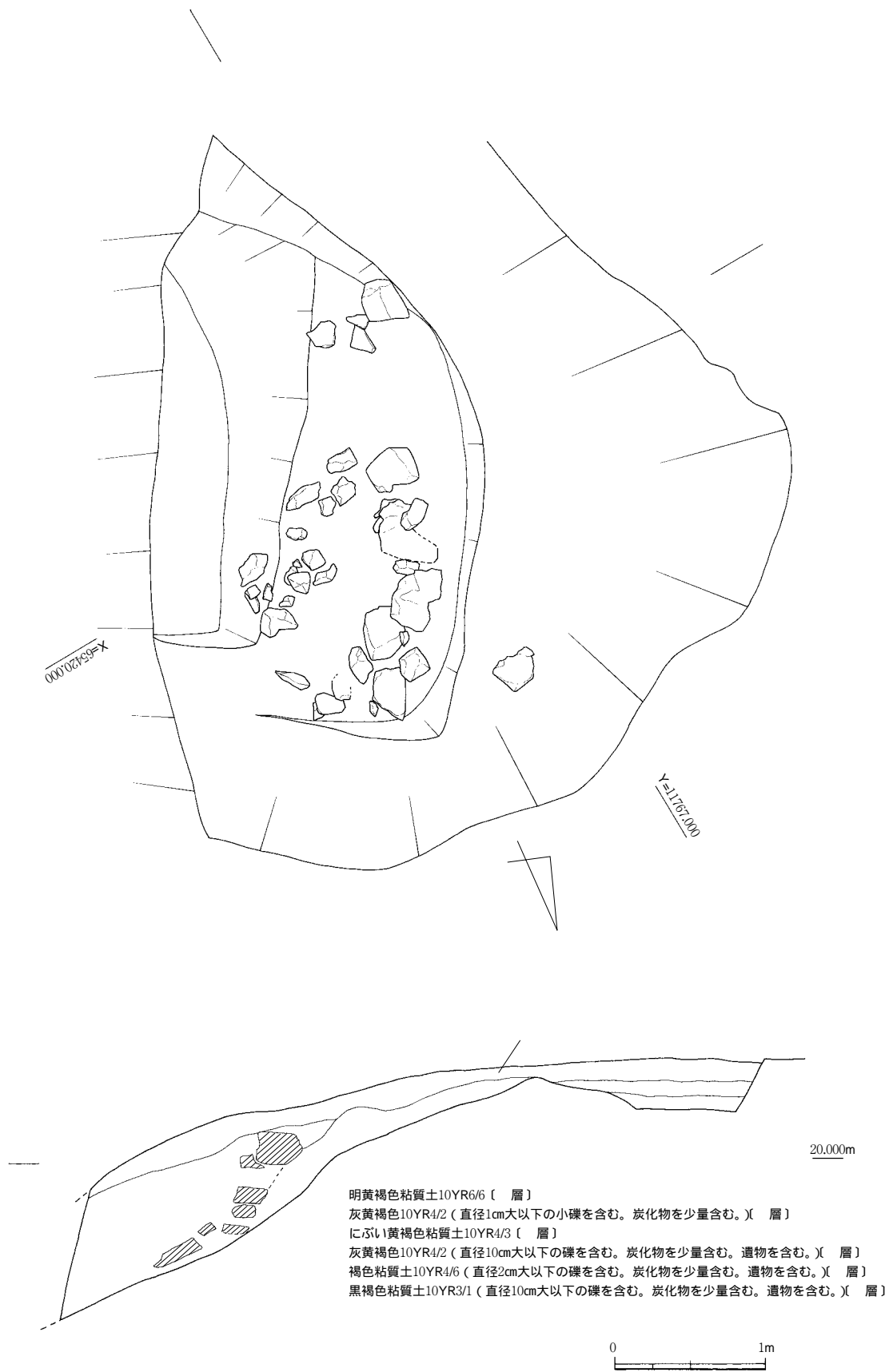


Fig.11 礫集中1 平面図・断面図

HH セクション

層は表土である。〔 層〕

層は褐色粘質土である。〔 層〕

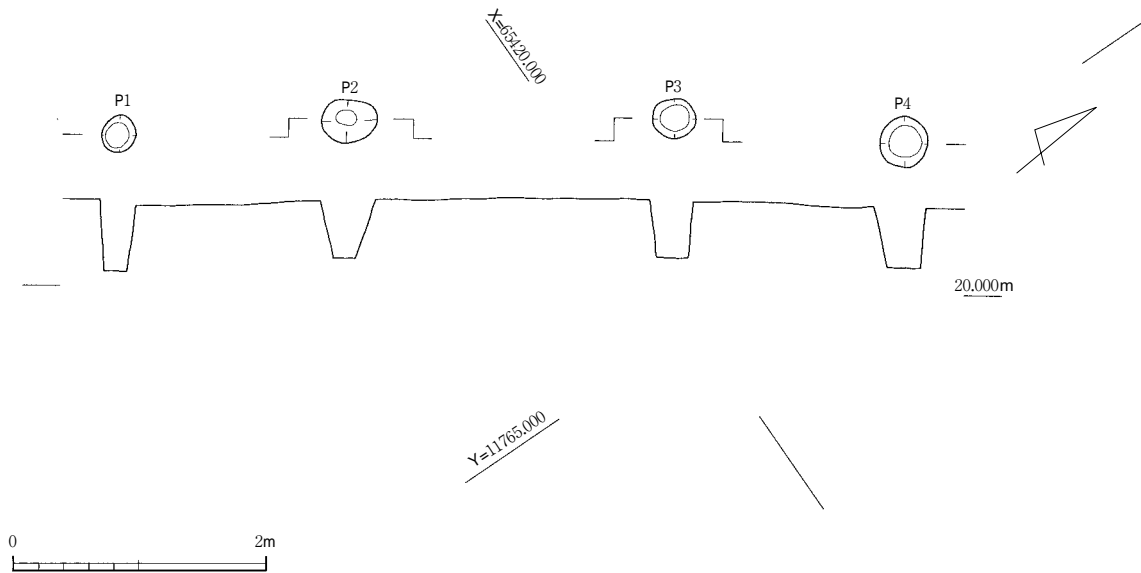


Fig.12 柱穴列平面図・エレベーション図

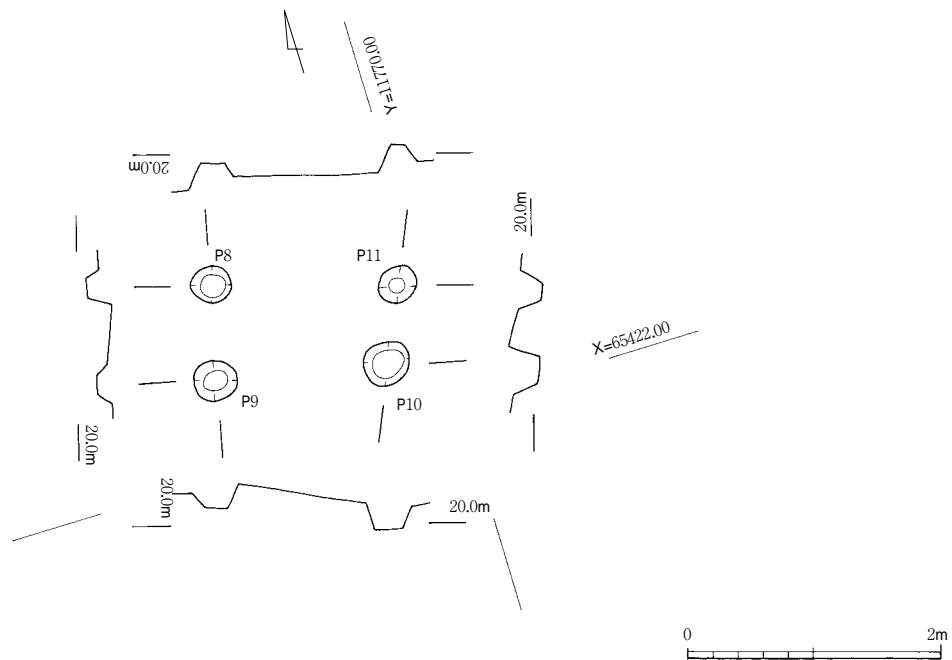


Fig.13 掘立柱建物跡平面図・エレベーション図

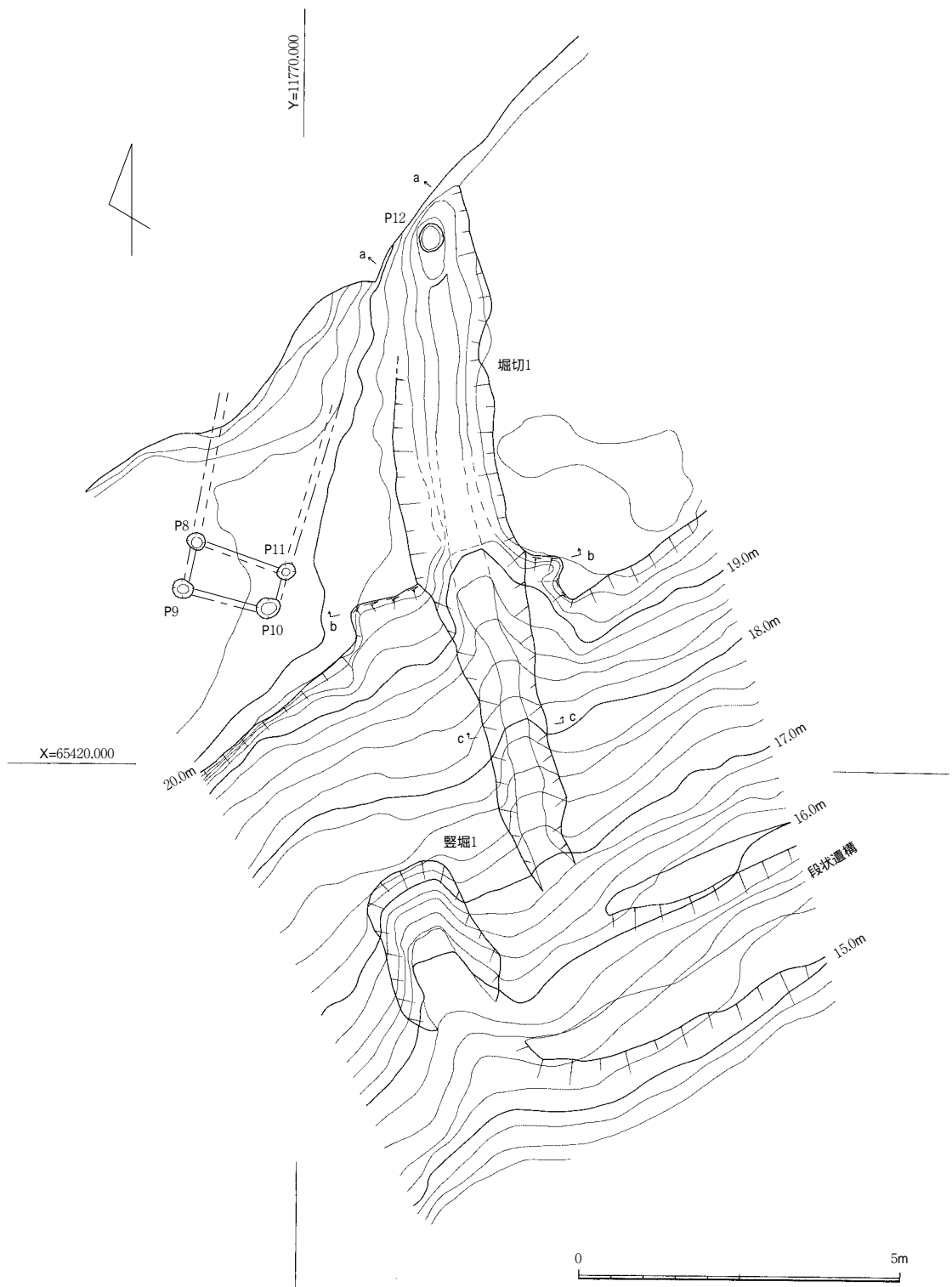


Fig.14 堀切1 平面図

(4) 検出遺構

曲輪 1

調査区の北西部に位置し、調査区外へもひろがる。土塁、竪堀 2、礫集中、柱穴などを検出した。南端部は一部盛土により曲輪 1 が拡張されていたと考えられる。

A. 土塁

曲輪 1 の北西部に位置する。大部分が調査区外にのびており詳細は不明である。削り残した地山の岩盤に盛土等により補強している。

B. 竪堀 2 (Fig.10)

曲輪 1 の南東部に位置する。地山の岩盤を掘削しつくられる。最大幅約 5 m である。曲輪 1 から傾斜角度 25 ~ 30 度で下がり、屈曲し緩やかな角度になる。

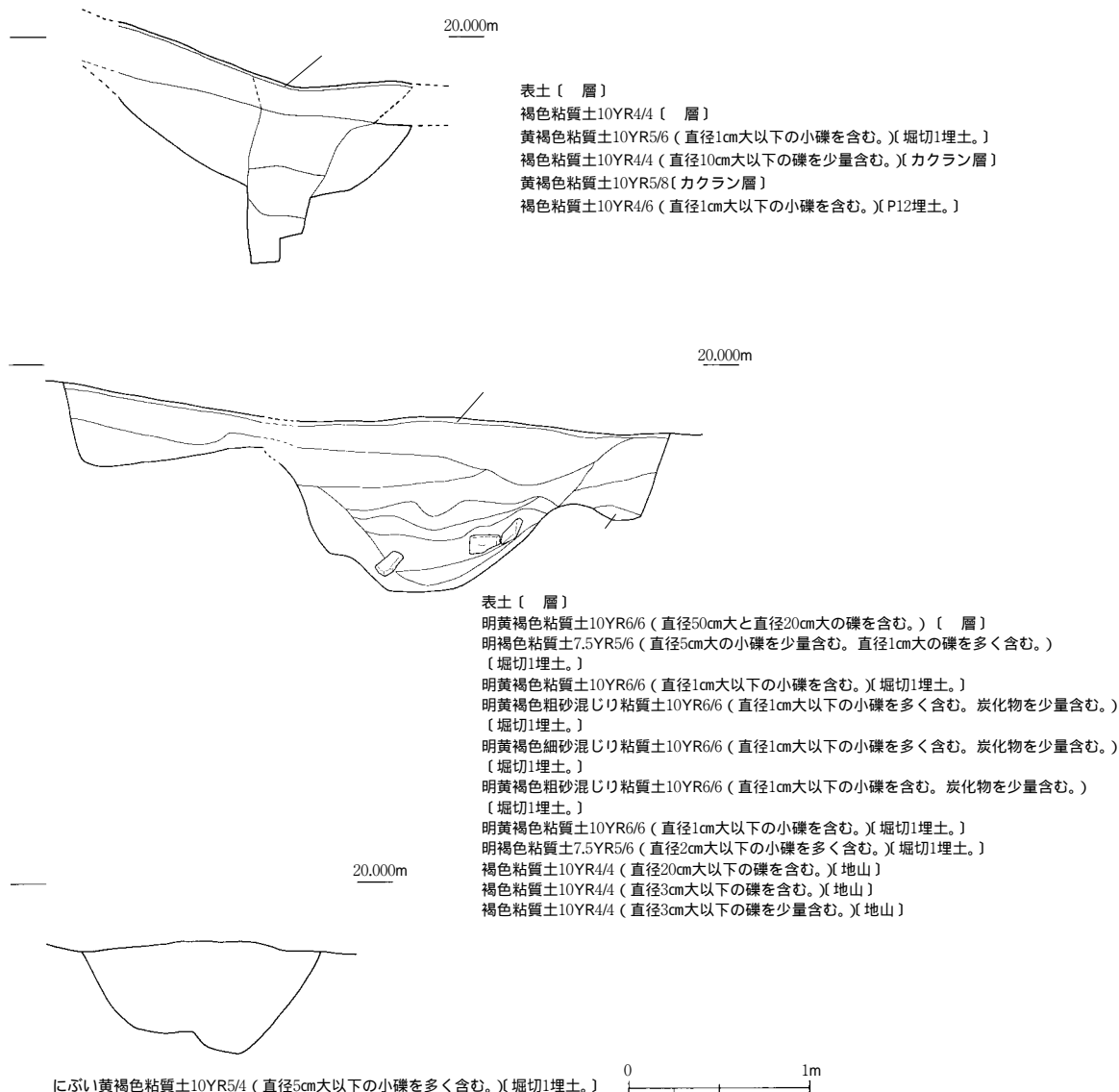


Fig.15 堀切 1 断面図



Fig.16 土橋 1 平面図・断面図

C. 礫集中 (Fig.11)

豎堀 2 を埋めるための土留めを目的に築かれたものである。礫の分布状況は比較的大型のものを中心付近に配する傾向が認められる。さらにこの礫集中の南側にも拳大から人頭大の礫が 5 点、ほぼ直線状に分布しており礫集中と一連のものと考えられる。層で埋められていた。出土遺物のうち図化できたものは 11・39・60・104 であるが、これらの他にも多くの遺物が出土している。

D. 柱穴

柱穴 1 は直径約 0.3m、深さ約 0.6m である。図化できなかったが、土師質土器片が出土した。柱穴 2 は長軸約 0.4m、短軸約 0.3m 深さ約 0.5m である。この柱穴は他の柱穴に比較すると側壁の立ち上がりも弱い。柱穴 3 は直径約 0.30m、深さ約 0.40m である。土師質土器片 (9) が出土した。柱穴 4 は直径約 0.35m、深さ約 0.50m である。図化できなかったが、土師質土器片が出土した。柱穴 5 は直径約 0.2m、深さ約 0.2m である。柱穴 6 は直径約 0.4m、深さ約 0.5m である。柱穴 7 は直径約

0.2m、深さ約 0.2m である。

さて、これらの柱穴のうち柱穴 1 から柱穴 4 は柱穴の軸が一直線に並んでいることから柵、塀、掘立柱建物跡に復元できる可能性がある。しかしながら、上述のように柱穴 2 は他の柱穴に比べると掘り形の明瞭さに欠けるため、ここでは柵、塀、掘立柱建物跡の可能性があると記述するに留めておくことにする。

掘立柱建物跡は柱穴 8 ~ 11 で構成される。柱穴 8 は直径約 0.25m、深さ約 0.20m である。他の柱穴に比べ最も明瞭なものである。壁面もしっかりとしていた。柱穴 9 は直径約 0.25m、深さ約 0.20

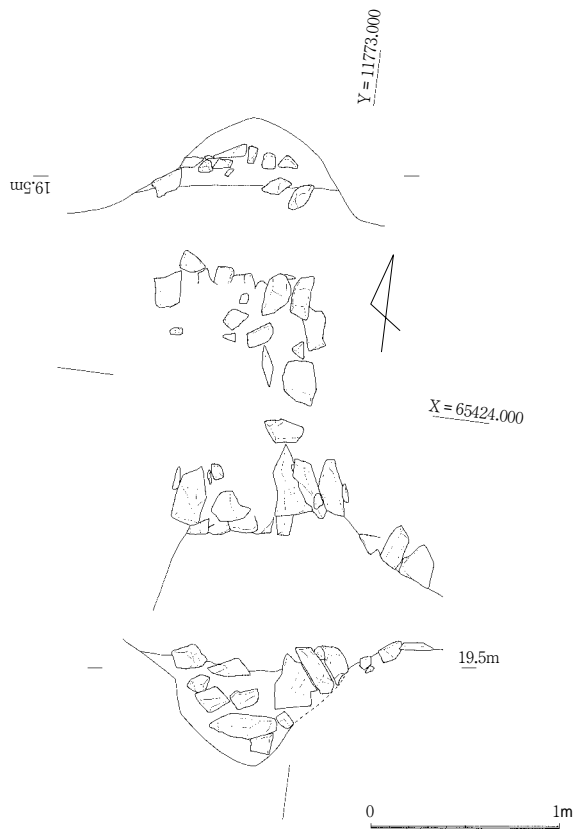


Fig.17 土橋 2 平面図・断面図

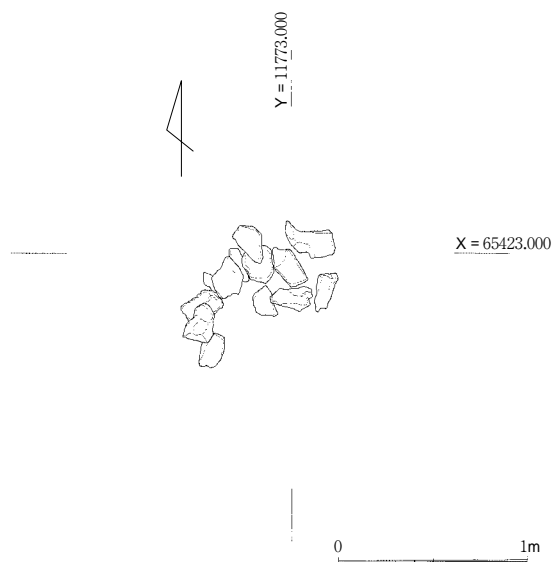


Fig.18 礫集中 2 平面図

mである。柱穴10は長径約0.35m、短径約0.30mの不整円形である。深さ約0.30mであるが、植物の攪乱を受けている。柱穴11は直径約0.20m、深さ約0.15mである。柱穴の心々間の距離は柱穴8～9間は約7.6m、柱穴9～10間は約1.4m、柱穴10～11間は約6.5m、柱穴11～8間は約1.5mである。これらの柱穴からは遺物は出土しなかった。土壘との位置関係から城門的な施設であった可能性がある。復元案については建て替えられた可能性も考えられる。上述のようにP8～P11で掘立柱建物跡を構成する。P8とP11があるいは、P9とP10がそれぞれ対となり土壘上との柱穴と掘立柱建物跡を構成している可能性もある。したがって2時期あるいは3時期にわたるものと考えられる。

E. 堀切 1 (Fig.14・15)

調査区の北西部で検出した。曲輪1と曲輪2とを遮断する形で存在する。尾根筋を横断するように掘削され、曲輪部分では幅約1.5m、深さは検出面から約0.6mを測る。断面形は「V」字形を呈していたと考えられる。一方、斜面部での断面形は緩やかな「U」字形を呈していたと推定される。断面観察は3箇所で行った。aaセクションは調査区の北壁である。層は堀切1の埋土である。層は攪乱である。層は後述するが柱穴の可能性もある。bbセクションは曲輪1・2の南端部に該当する。堀切1の東肩部の立ち上がりは比較的明瞭であり、表土直下までその立ち上がりを確認することができる。一方、西肩部は木の根が存在しており明確に立ち上がりを確認することはできなかった。層は堀切1の埋土であり、層と層が、層と層がそれぞれ色調、土質、含有物とも類似している。層は出土遺物もなく盛土ではなく地山であると推定される。ccセクションは堀切1の南端部付近に該当する。

断面形は緩やかなカーブを描き、残存する深さも浅い。図化できた出土遺物は94・115であるが、詳細な時期決定できるものは出土していない。

また、堀切底で柱穴（P12）を1基検出した。長軸0.4m以上、短軸は約0.3mである。深さは約0.4mである。aa セクションを観察するとP12の上層には攪乱が存在する。この攪乱からは針金が出土しており、P12の埋土とも異なる。また、平面形態においても攪乱は溝状を呈しておりP12とは異なることから、両者は一連のものというよりも違う可能性が高い。しかし、堀切内での柱穴の機能を考慮する必要もあり、このような堀切内での柱穴の検出例を待ち攪乱なのか柱穴なのかを判断したい。

F. 土橋 (Fig.16~19)

土橋は堀切1を埋め構築され、さらに拡張されていた。ここでは便宜上、最初の構築されたものを土橋2とし拡張されたものを土橋1とする。

土橋2は幅約1.6mを測る。礫混じりの粘質土で固め、両端は崩落防止のため礫が積まれていた。斜面部に位置する南面を特に頑丈に積まれていた。まず曲輪部分の堀底と同レベルになるように礫を積む工程を確認できる。出土遺物は図化できなかったが、土師質土器片が少量出土したのみである。

土橋1は南面は土橋2と共有し、北側にのみ約1.7m拡張し幅約3.3mを測る。北面についても礫を積み崩落防止が行われている。縦断面は北端部の詳細な実測図を作成することはできなかったが、北端部から土橋中央にむかい礫の厚さは薄くなっており、土橋2と接する部分には礫は認められなかった。

また、土橋の南側には人頭大の礫が集中していた（礫集中2）。これらの礫は堀切1の底か

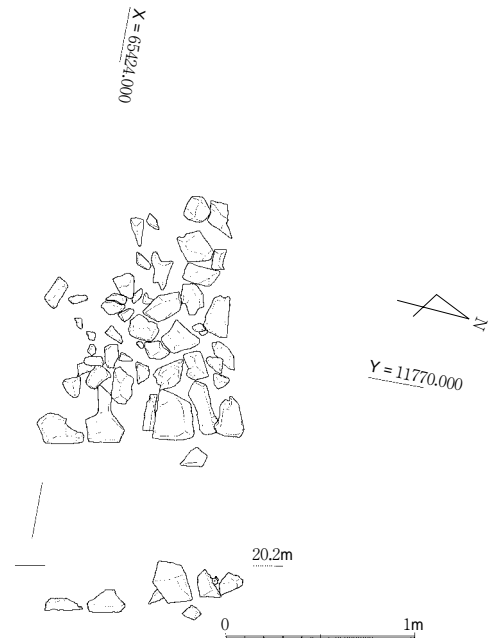


Fig.19 礫集中3 平面図・立面図

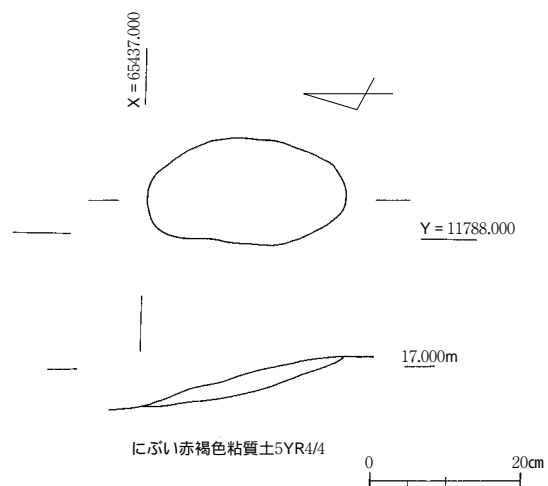


Fig.20 焼土跡1 平面図・断面図

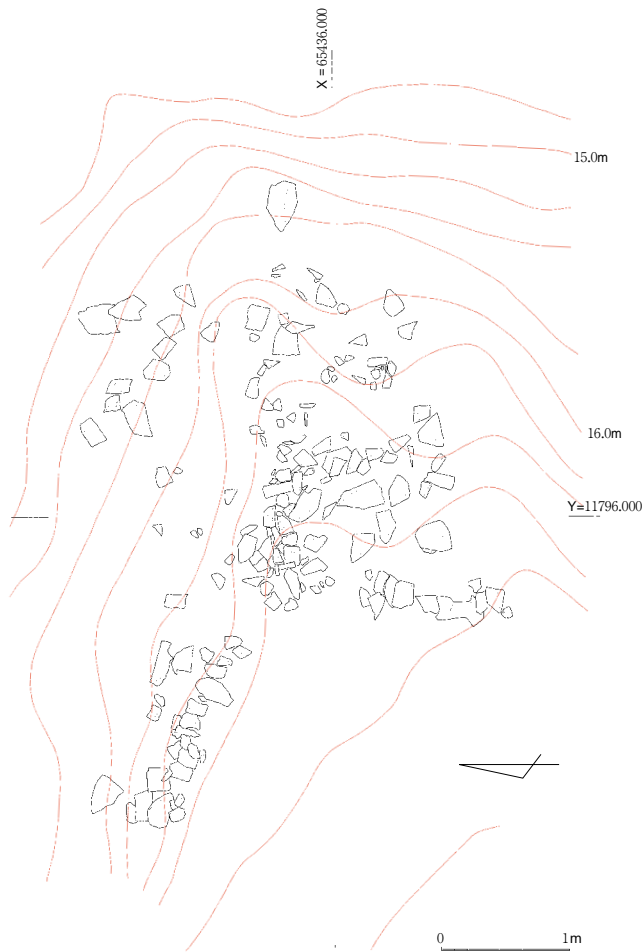


Fig.21 礫集中4平面図

らやや浮いた状態で検出している。これらの礫は土橋の一部が崩落したものであるのか、あるいは土橋の南東部で検出された礫のように曲輪の端部に巡らされていたもの等が考えられる。

G. 礫集中3

曲輪1の北東部で検出した。人頭大の礫を東側に面を揃えながら据える。堀切1側の中軸ラインとは若干ずれる。また、その内側には川原石を含む人頭大の礫を一面に配する。この礫集中の西南部のラインは土塁の延長方向と一致し、土塁とも近接することから土塁の基底となる可能性がある。

曲輪2

調査区の中央部やや北寄りに存在する。東方向にいくなつれ緩やかに下がり曲輪3と連結する。柱穴等の遺構は検出されなかった。

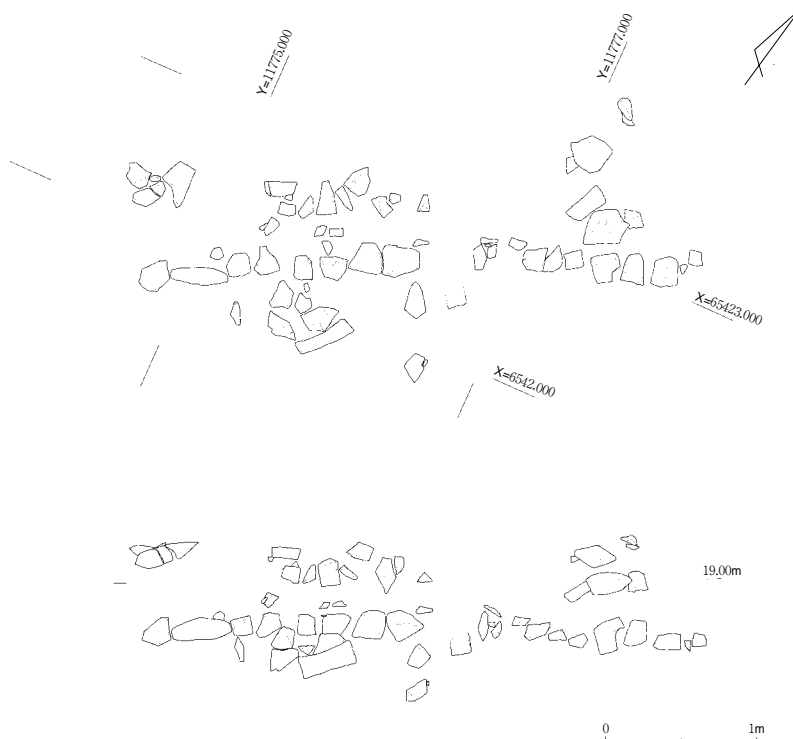
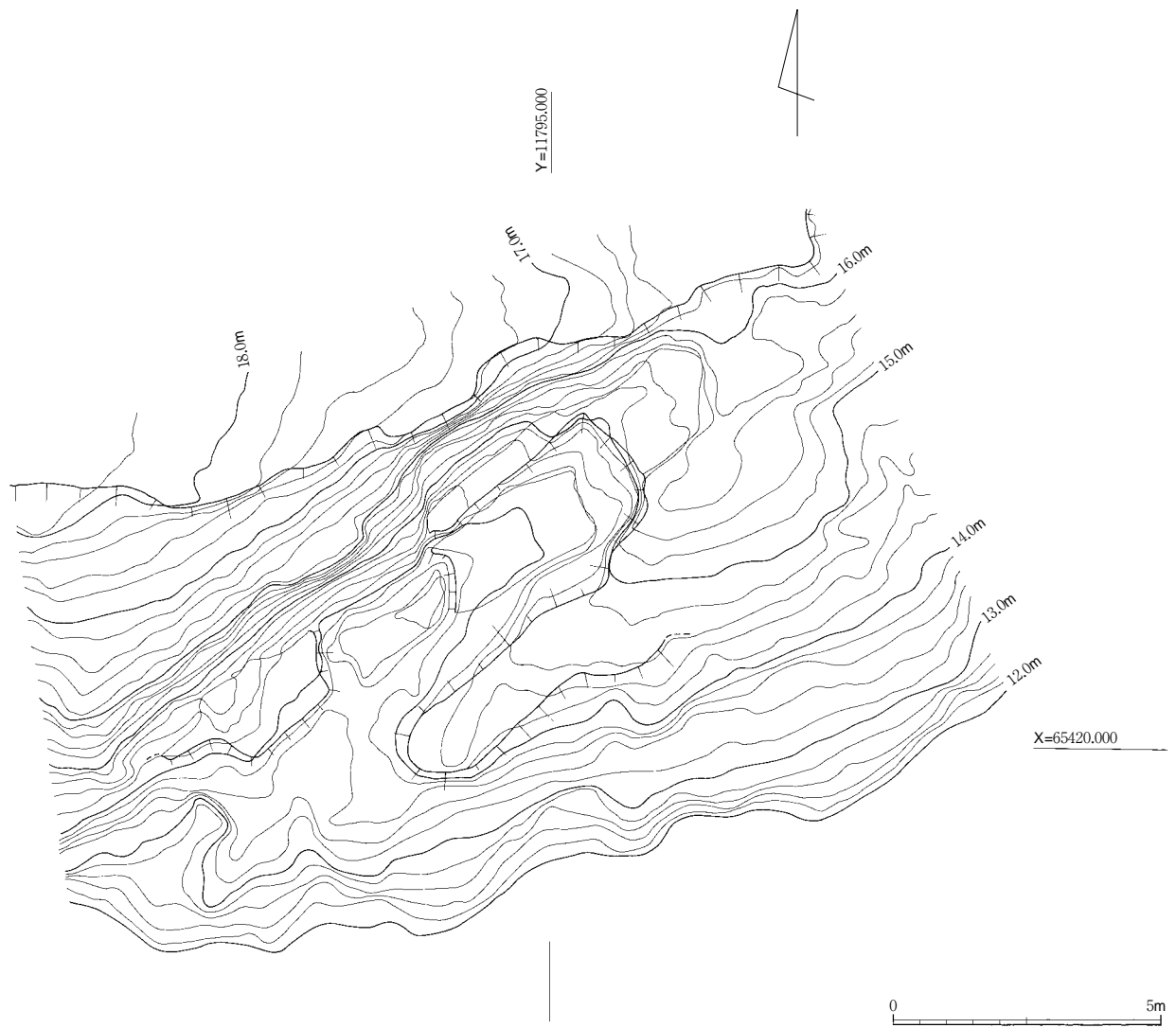


Fig.22 石列1平面図・立面図



表土〔層〕
 にぶい黄褐色粘質土10YR5/4
 明黄褐色粘質土10YR6/6（直径10cm大以下の礫を含む。）
 礫層
 明黄褐色粘質土10YR6/6（直径10cm大以下の礫を含む。）
 礫層
 明黄褐色粘質土10YR6/6（直径30cm大以下の礫を少量含む。）

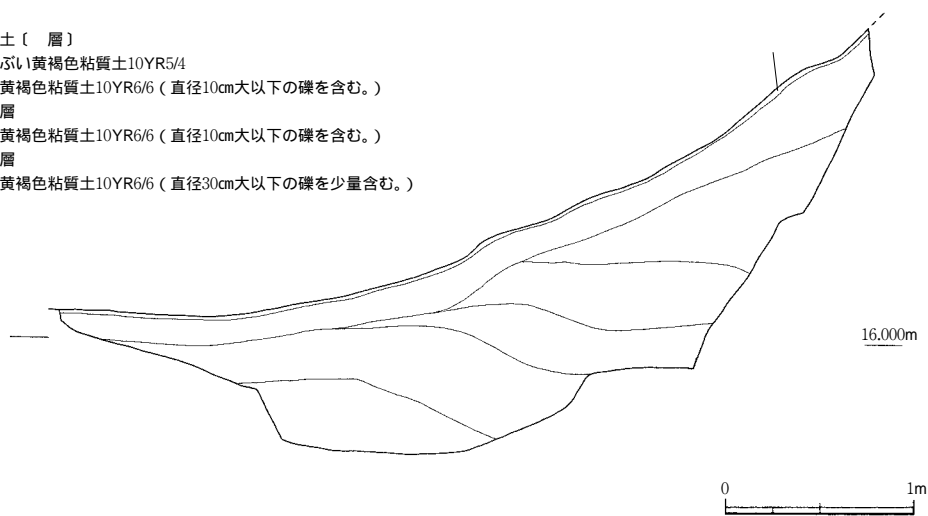


Fig.23 横堀平面図・断面図

曲輪 3

調査区の北東部で検出した帯曲輪であり、礫集中と焼土跡を検出した。堀切 1 と連結するかは調査区外であるため不明である。

A. 礫集中 4

礫集中は曲輪 3 の東部で検出した。礫には規則性が認められず散布していた。礫集中の分布範囲と盛土である 層の分布範囲がほぼ重なることから、盛土の崩落防止を目的としたものと考えられる。この盛土は南側の突出部と同じ長さまで意図的に盛土されており、虎口状遺構を形成していたものと推定される。

B. 虎口状遺構

上述の盛土は南側の突出部と同じ長さまで意図的に盛土されており、虎口状遺構を形成していたものと推定される。この虎口状遺構の奥壁はやや直立気味である。

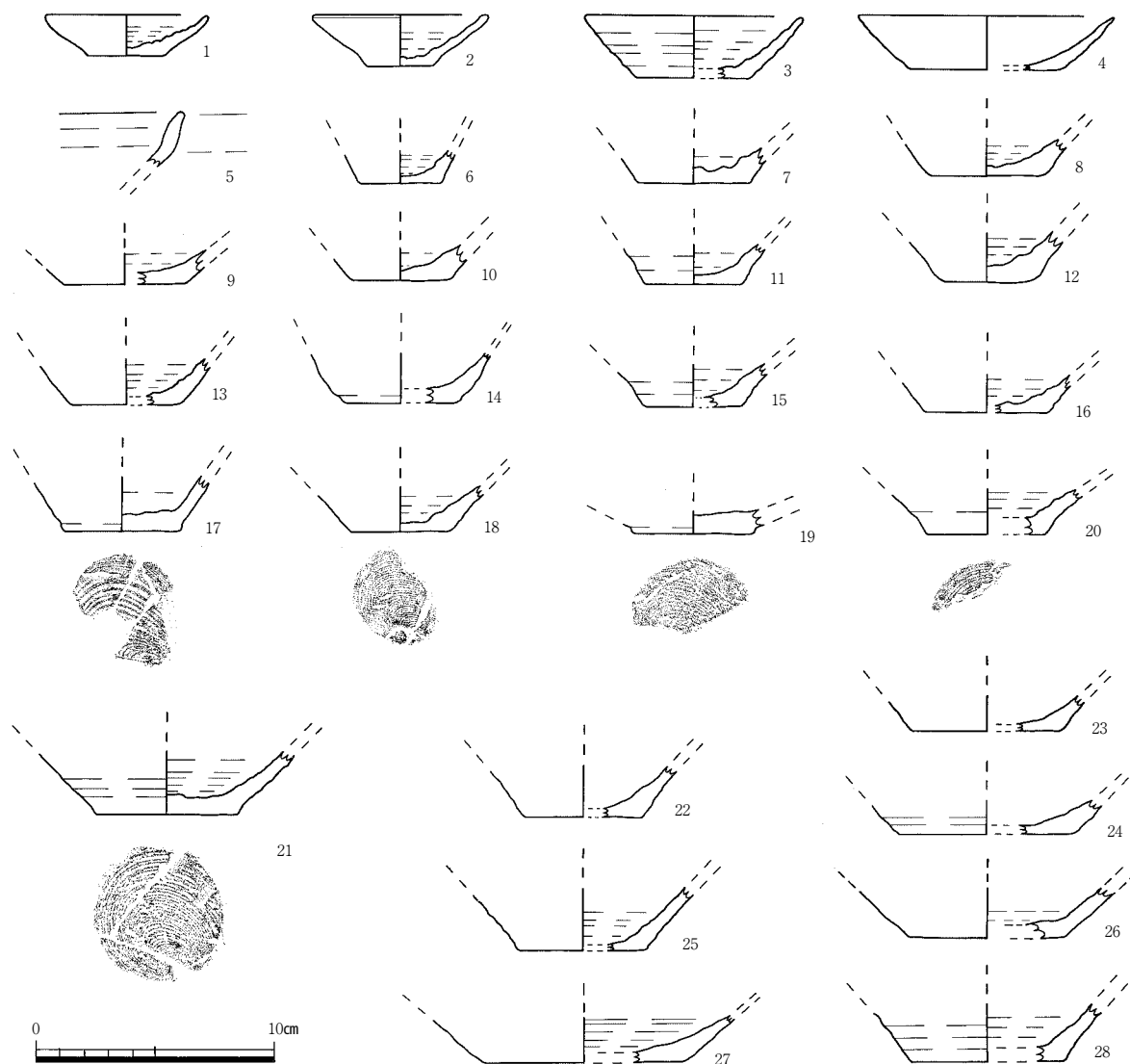


Fig.24 土師質土器実測図

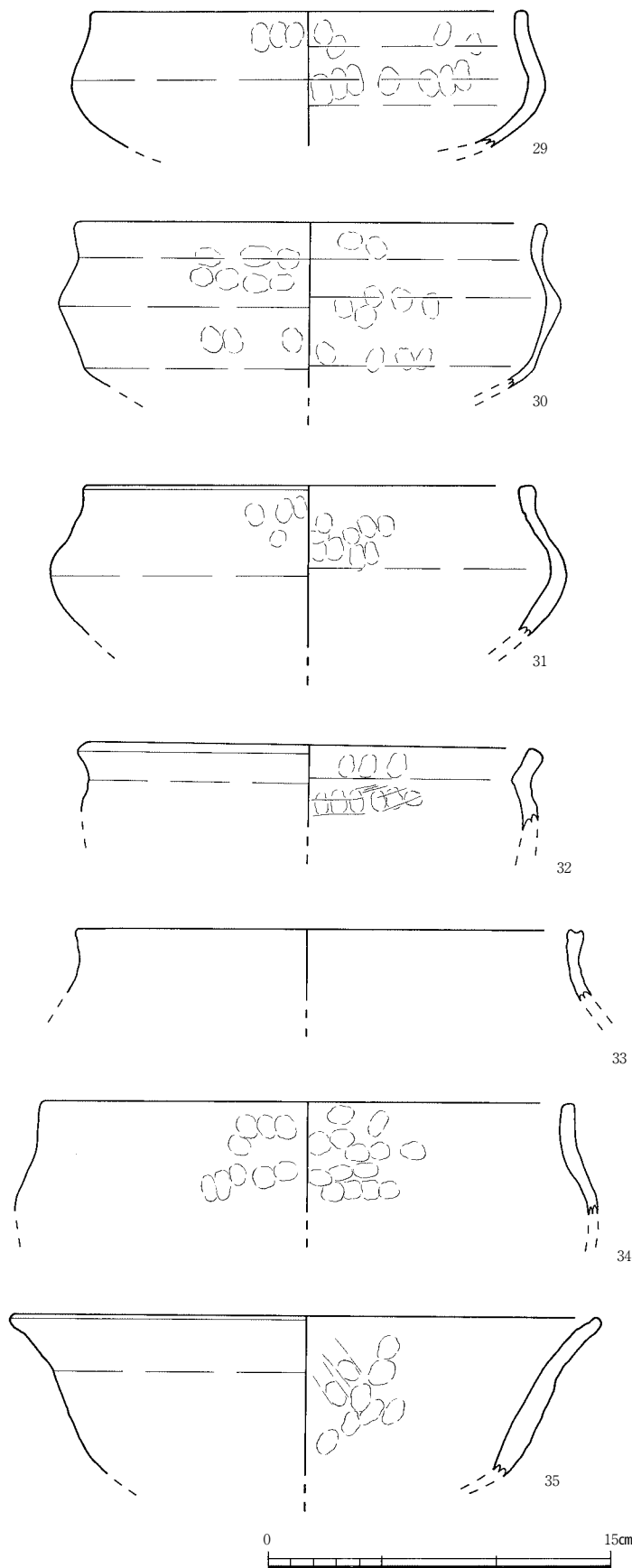


Fig.25 瓦質土器実測図 1

C. 焼土跡

曲輪 3 の北東部で検出した。長軸約0.3m、短軸約0.14mを測る。深さ約 3 cmにわたってにぶい赤褐色を呈していた。また、北東部に炭化物が集中していた。

石列 1

調査区中央部、曲輪 2 の斜面部に等高線に平行して築かれていた。3 状検出できたが中段は比較的残存していた。川原石を含む人頭大の礫で構成されていた。土留めを目的に構築されたと考えられる。この石列と岩盤層との間に堆積していた土は大木が存在したため完全に掘削できなかったが、遺物は出土しなかった。また、土層も積極的に盛土と判断することができないことから地山であると考えられる。

竪堀 1

調査区の中央部南、曲輪 1 の斜面部で検出した。幅約1.5m、検出水平長約2.5m、深さ約0.5mである。出土遺物は下層から土錘 (64) が 1 点出土しているのみである。また、堀底から浮いた状態で、50 × 20 × 30cmの礫と拳大の礫を検出した。

段状遺構

調査区の南東部、曲輪 2 の斜面部に 2 段築造されている。幅約 0.7mである。平坦部と斜面部のめりはりはあまりない。

位置関係から、堀切 1 と竪堀 1 と段状遺構は有機的な関連を有し

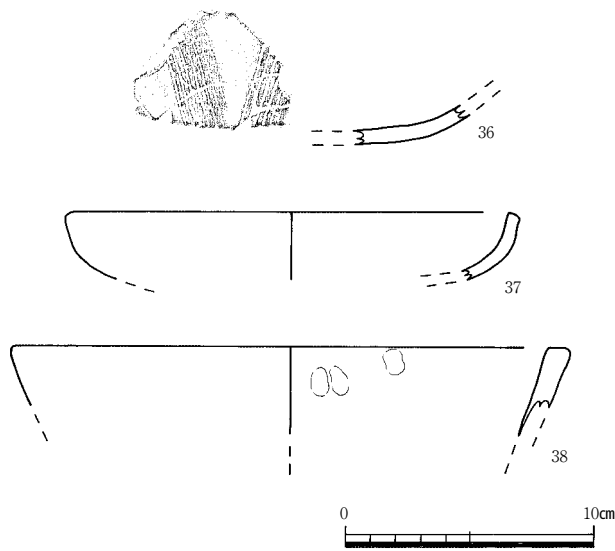


Fig.26 瓦質土器実測図2

ていたと考えられる。

横堀

調査区の南東部、曲輪2の南斜面部で検出した。曲輪2からは切岸となり横堀の北壁となる。長軸約7.0m、短軸約2.4mである。深さは約0.7mであるが、曲輪3からは約3.3mである。セクションを観察すると岩盤崩落層を確認することができる。さらに間層を挟んで岩盤崩落層が存在することから少なくとも2回以上崩落したものと考えられる。これらの点を考慮すると、当初の形態と異なっている可能性が高い。遺物は出土しなかった。

(5) 出土遺物

1から28は土師質土器である。1は小杯である。内面にはロクロ目が残存する。2は小杯である。口縁端部の一部に煤が付着する。灯明皿として利用されていたと考えられる。平らな底部から直線的に口縁部がのびる。内面にはロクロ目が残存する。5は口縁端部が外反する。手づくねの可能性はある。21は杯である。底部外面には回転糸切り痕跡が認められる。ロクロ成形であり、内面にはロクロ目が残る。外面は回転ナデ調整である。25は杯である。平らな底部から体部が直線的にのびる。内面にはロクロ目が残存する。

29から35は瓦質土器の鍋である。29は口唇部を平坦に仕上げる。体部最大径以下に煤が多く付着する。30は体部から口縁部にかけての屈曲は明瞭である。32は口縁部は短く明瞭に屈曲する。口唇部は平坦に仕上げる。33は口唇部は凹面状を呈する。34は体部から口縁部にかけて緩やかに屈曲する。35は口縁部は大きくひらく。内外面は主としてナデ調整である。36は播鉢である。内面には7条1単位の播り目が認められる。37は鉢である。口縁部は直線気味に短く立ち上がる。口唇部は平坦に仕上げる。外面に煤が付着する。38は器形不明である。口縁部は直線的であり、口唇部は平坦に仕上げる。39から48は備前焼である。39は小壺である。口唇部は丸くおさめる。胎土に白色の砂粒を多く含む。40は壺である。口縁部は玉縁を呈する。41から47は播鉢である。41は口唇部は外傾する面をなす。内面はごくわずかに肥厚する。内外面はナデ調整である。43は口縁部は直立気味であり、端部をやや尖らせる。10条1単位の播り目が認められる。胎土には直径8mm大以下の砂粒を多く含む。45は口縁部は上方に拡張させ、端部は内傾する面を形成する。内面には7条1単位の播り目が認められる。46は口縁部上方に大きく拡張し、片口状を呈する。内面には9条1単位の播り目が認められる。47は口縁部は上方に拡張され、端部を軽くつまみ上げる。内面には9条1単位の播り目が認められる。内外面は回転ナデ調整である。48は水屋甕である。体部に断面形が三角形の突帯が1条めぐる。

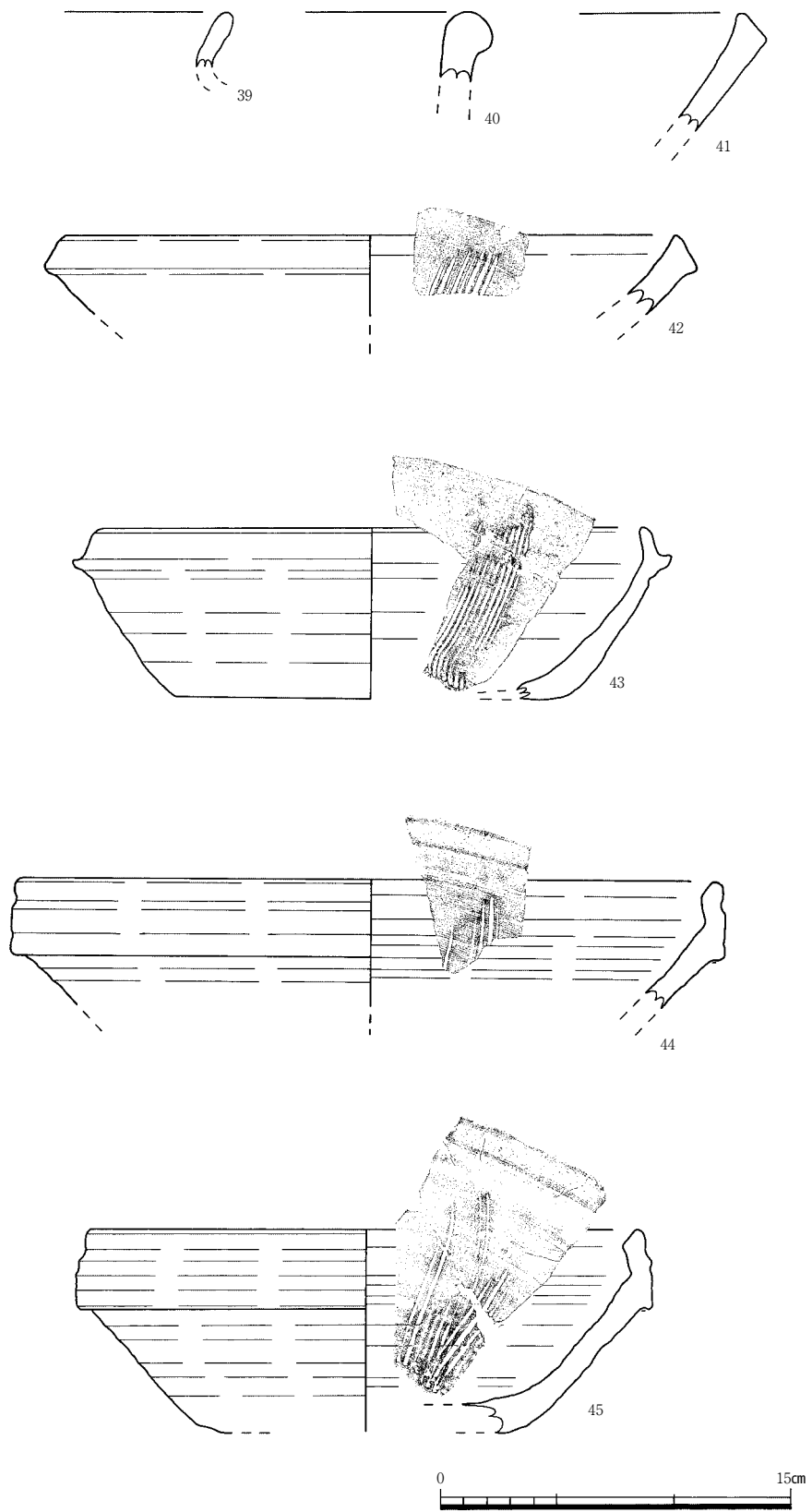


Fig.27 備前焼実測図 1

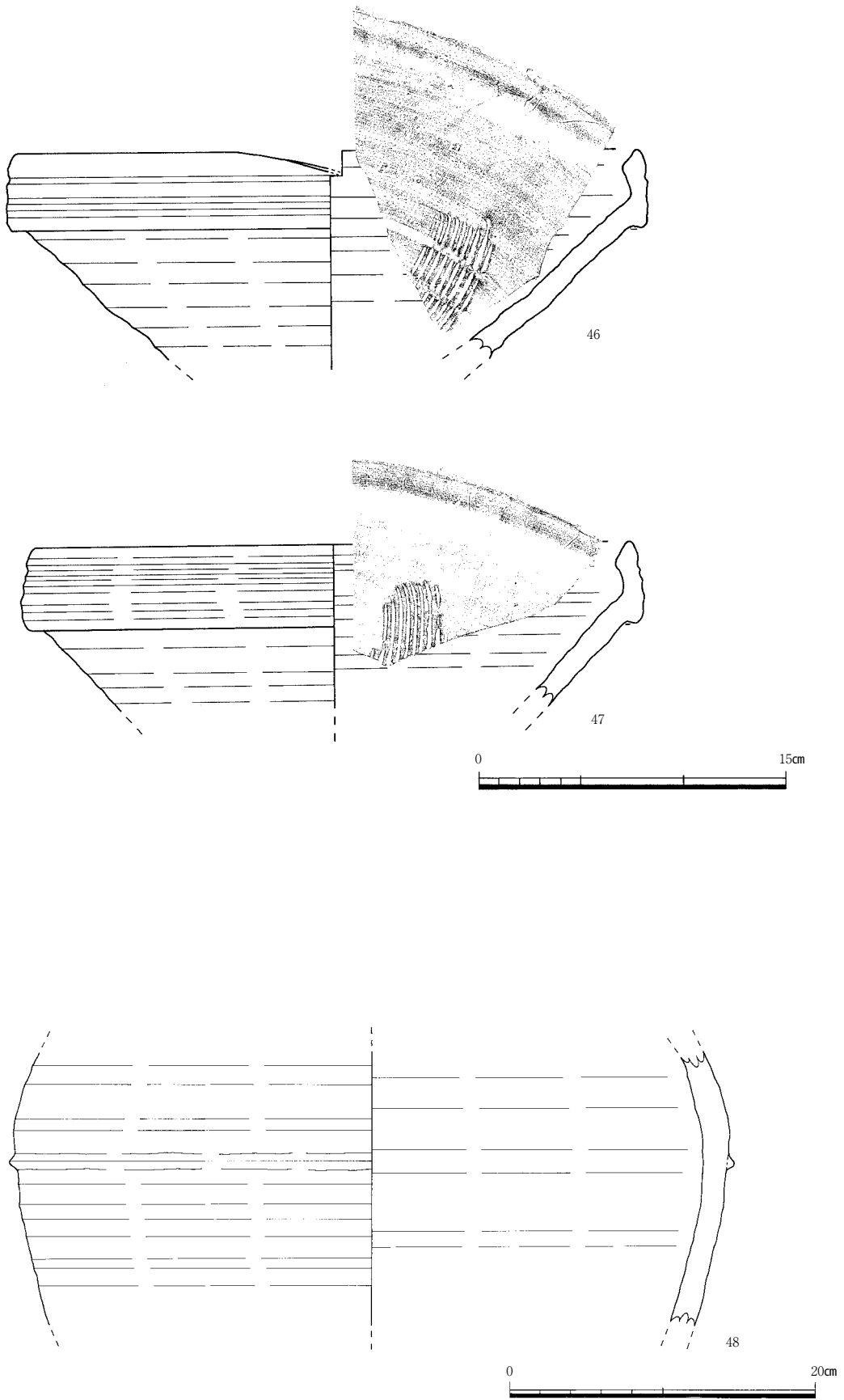


Fig.28 備前焼実測図 2

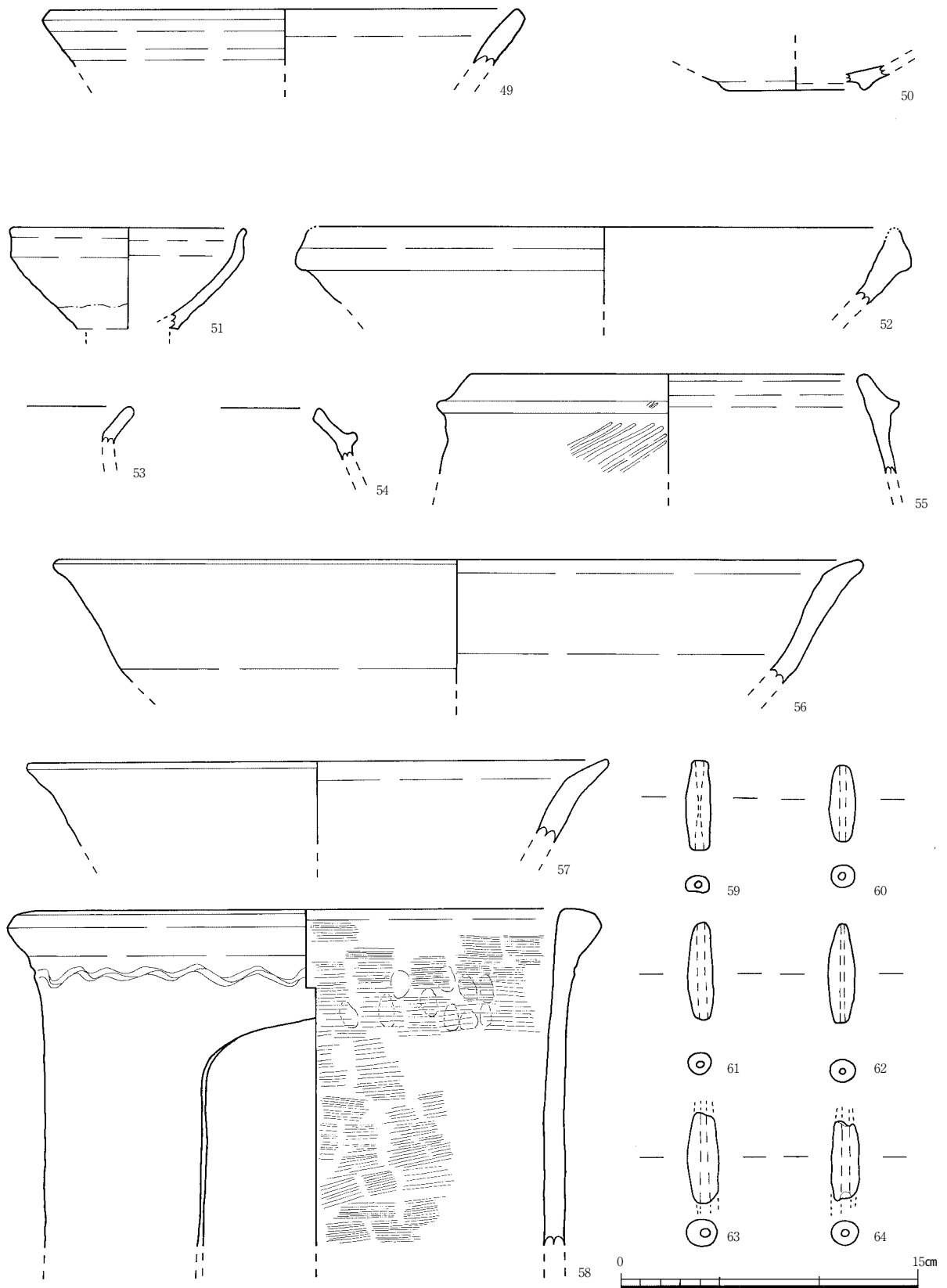


Fig.29 土師質土器・土師器・陶器・土製品実測図

49は陶器の口縁部片である。口唇部は外傾すると推定され、造りはシャープである。無釉である。50は土師器椀である。ローリングを受けている。概ね12世紀に比定できる。51は瀬戸美濃焼の天目茶碗である。内面と体部上半には黒褐色の釉がかかり、体部下半は露胎である。52は土師質の鉢である。口唇部は上方につまみあげられており、下方に拡張される。53は土師質土器の鍋であり、口縁部よりやや下がった位置に突帯がつく。口唇部は平坦に仕上げられており、外面に粘土が突出する部分がある。55は土師質土器の鍋である。全体的にやや摩耗している。突帯の断面形はにぶい方形を呈する。体部外面と突帯の一部には叩き目が残存する。56・57は土師質土器の鍋であり、両者とも同様の形態である。体部はやや内湾気味に立上がり、口縁端部が大きくひろく。56の口縁部内

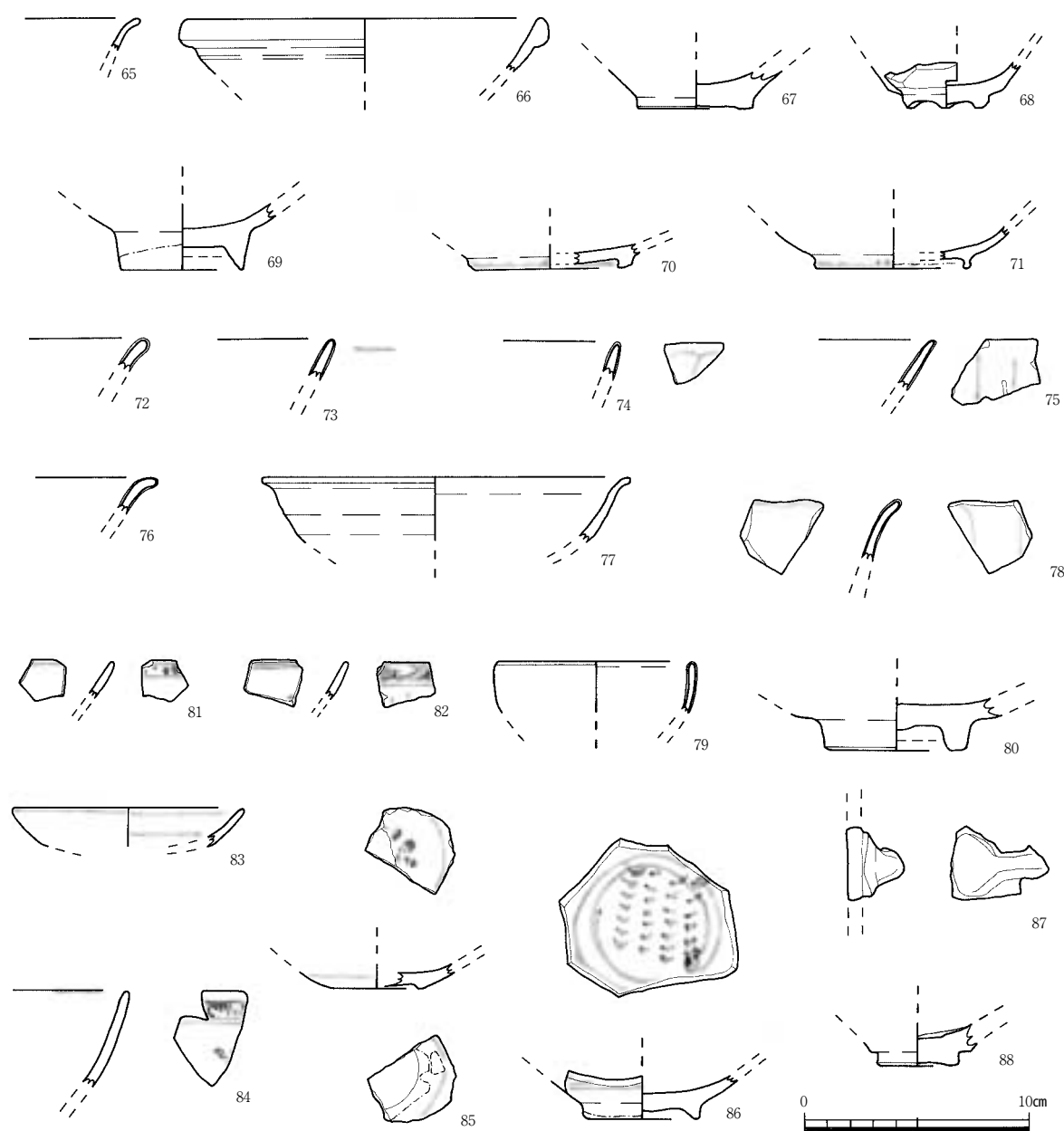


Fig.30 貿易陶磁器実測図

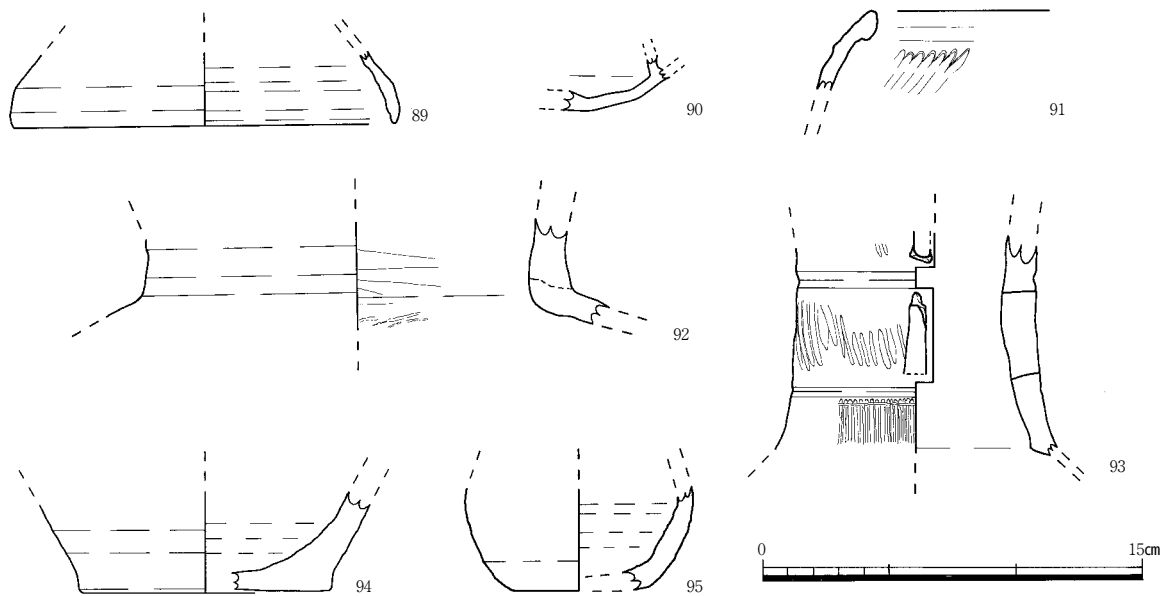


Fig.31 須恵器実測図

面には比較的明瞭な稜がめぐる。58は土師質土器の火舎である。体部はほぼ直立し、口縁部は外面に肥厚し、口唇部は平坦面に仕上げる。上胴部には鋭い工具により緩やかな波状の文様が施される。隅丸方形の大きな開口部があく。外面はナデ調整、内面には横方向のハケ目が認められる。59から64は土錘である。

65から88は貿易陶磁器である。65は白磁の端反り皿である。66は白磁の碗である。口縁部は玉縁状を呈する。類である。67は白磁の碗である。内面にはオリブ灰色の釉薬がかけられる。外面は露胎である。ローリングを受けている。類である。68は白磁の八角皿である。高台はアーチ状に削られる。内面は施釉されるが、外面の腰部以下は露胎である。高台と見込みに目跡が残る。69は白磁の碗である。類である。内面は施釉する。外面は高台の一部までを施釉し、それ以下は外底面まで露胎である。70・71は白磁の皿である。E群であり、高台には砂が付着する。畳付け以外は白濁色の釉薬がかけられている。72は青磁の碗である。口縁部外面を肥厚させる。73は青磁の碗である。外面に界線が一条めぐる。74は青磁の皿である。75は青磁の碗である。口唇部は内面のみ緩やかに丸味を帯びる。外面には剣頭の省略された細蓮弁文が施される。76は青磁の碗である。口縁部を外反させる。D類である。77は青磁の碗である。口縁端部を外反させる。釉薬は薄い。78は稜花皿である。口縁部内面には口縁部に沿って界線がめぐる。79は青磁の皿である。80は青磁の碗である。しっかりとした高台がつく。内面と外面の高台に釉薬を施す。畳付けおよび底部外面は露胎である。二次焼成を受けている。81は青花皿である。内面には1条の界線がめぐる。外面には波涛文を施す。胎土は粗製である。C群である。82は青花皿である。内面には内面には1条の界線がめぐる。外面には波涛文、芭蕉葉文を施す。C群である。83は青花の皿である。内面に2条、外面

には1条の界線がめぐる。84は青花の碗である。内面には界線が1条めぐる。外面には波濤文を施す。85は青花の皿である。見込みには花文が描かれ、1条の界線が認められる。外面腰部に1条の界線が認められる。外面に目跡が認められる。外底面は露胎である。胎土は粗製である。86は青花の皿である。内面には2条の界線に囲まれたなかに列点文を描く。外面には2条の界線が認められる。高台には繊維状のものが付着する。漳州窯系の製品である。87は中国産の壺の把手である。88は中国産の天目茶碗である。全体的にシャープな造りである。見込みの釉薬は厚く約2mmである。

89から93は須恵器である。89は杯蓋である。口唇部は丸くおさめる。回転ナデ調整である。90は杯身である。立ち上がりは短いものと推定できる。受け部も短いものと考えられる。内外面とも回転ナデ調整である。ややローリングを受けている。91は壺の口縁部である。口縁端部を折り曲げ肥厚させ、口唇部はとがり気味におさめる。頸部外面には刺突文を施す。内外面とも回転ナデ調整である。92は壺である。肩部内面には当て具痕跡が残存する。93は壺の脚部と考えられる。凹線2条

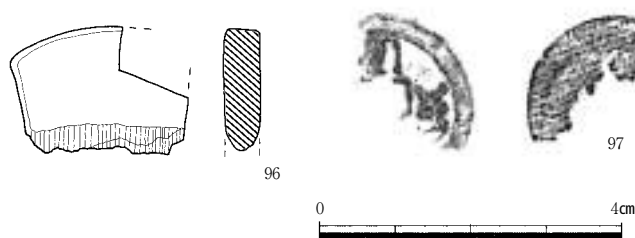


Fig.32 櫛・銅銭実測図・拓影

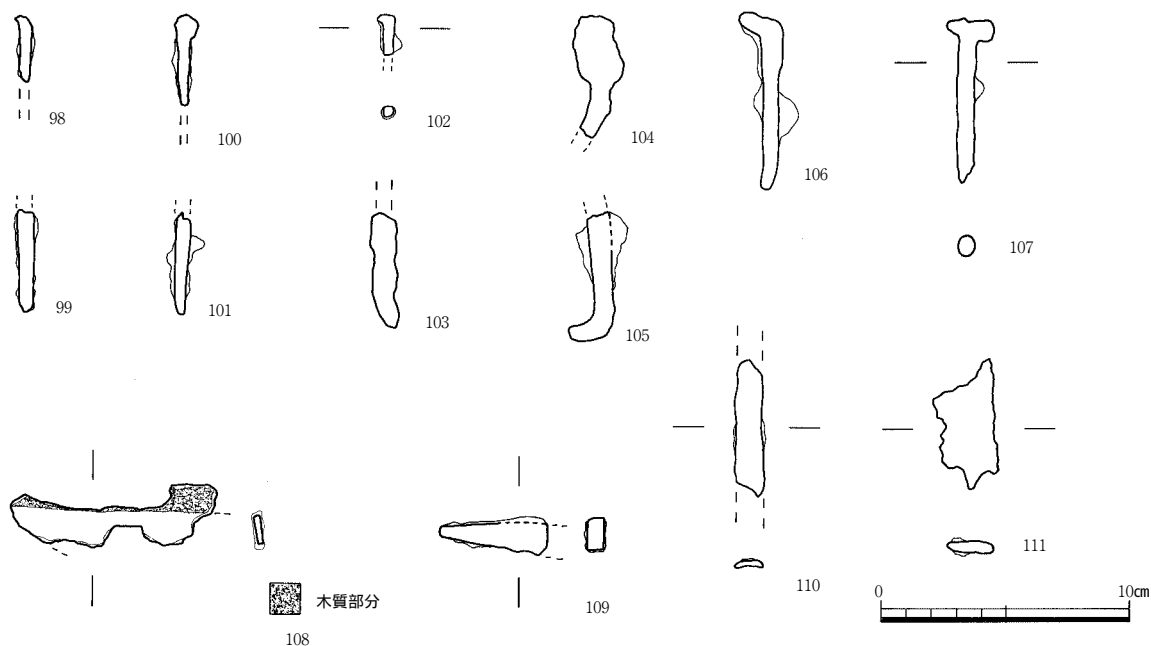


Fig.33 鉄製品実測図

を挟んで3区画が残存している。上二段には4方向に平面形が長方形の透孔が穿たれているものと推定できる。また、上二段には刺突文が、最下段には列点文が施される。内外面とも回転ナデ調整である。94は壺の底部である。中央部が薄い底部からやや急に立ち上がる。底部外面には糸切り痕跡が認められる。古代である。95は壺である。緩やかなカーブの体部をもつ。内外面とも回転ナデ調整を施す。断面はセピア色に発色する。

96は木製の櫛と考えられる。全体的に炭化している。

97は銅銭である。腐蝕が激しく、銭種を特定することができなかった。

98から107は鉄製の釘である。錆び付着のため断面形が不明なものが多い。107は表土近くの出土であり、時期的に新しい可能性があるが断面形が方形を呈していることなどから報告した。108は鉄製の小刀である。切先はカーブを持っている。それに沿う形で木質部が残存していた。鉄部分の残存値は2mm×12mmであり、厚さは0.5mmである。中は腐食しており空洞である。109は鉄製の小刀

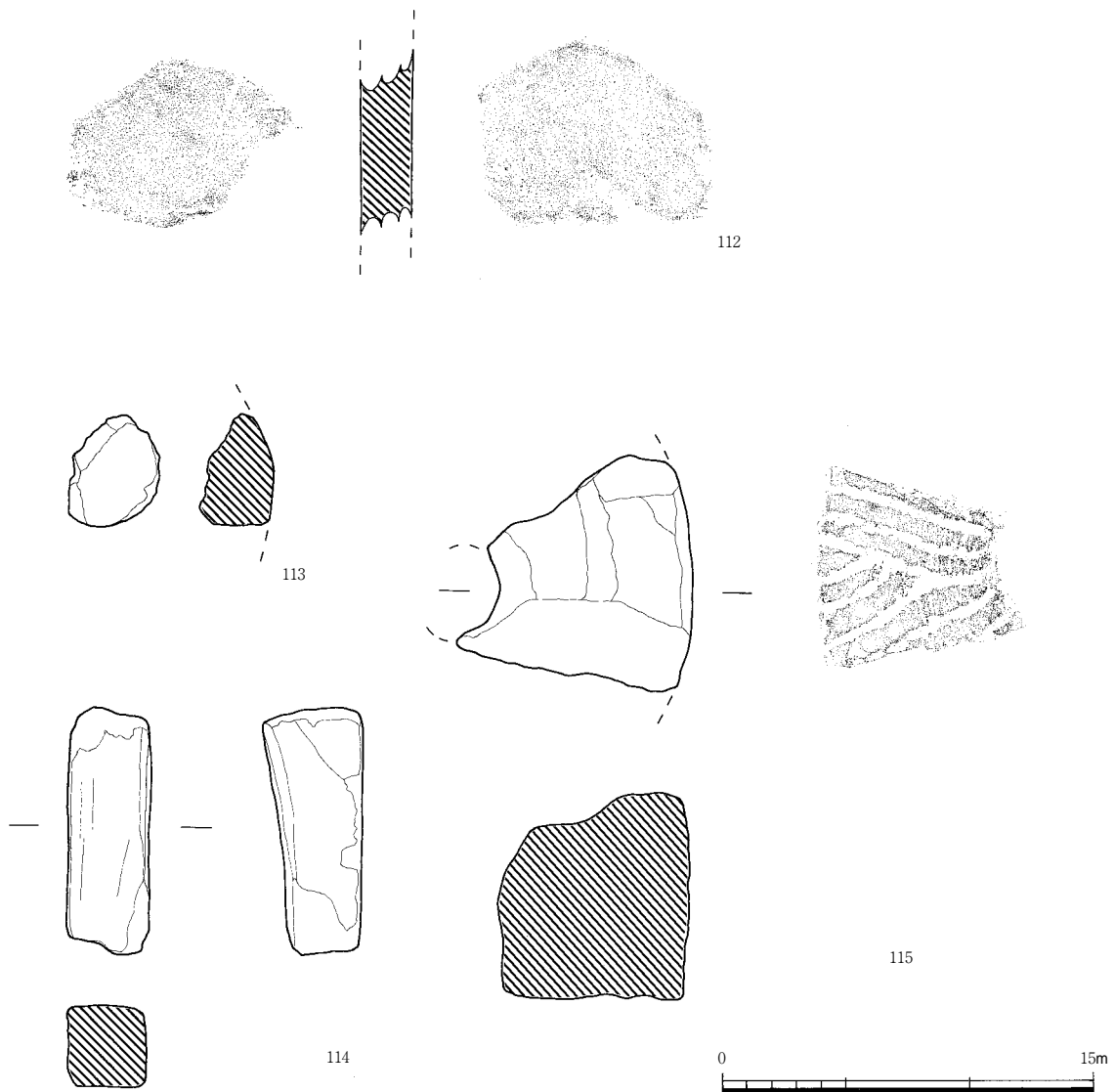


Fig.34 瓦・石製品実測図・拓影

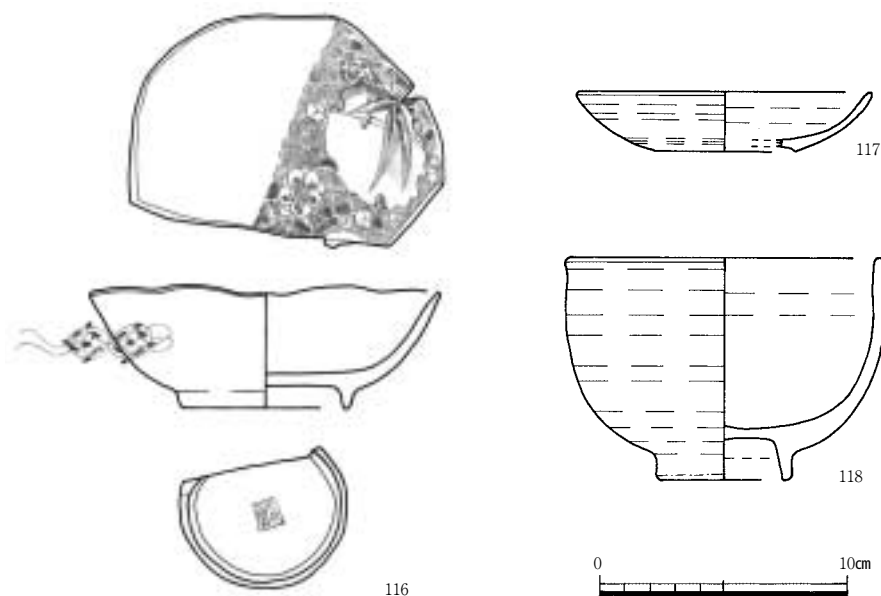
である。断面形は長方形であり、平面形は楔状を呈している。110は不明鉄製品である。扁平であり、断面形は若干中央部が窪む。111は不明鉄製品である。表土近くでの出土であり、また錆びの付着状態も他の鉄製品と異なり、時期的に新しい可能性がある。

112は瓦である。平瓦の破片である。この他にも平瓦と考えられる破片が6点出土している。出土地点もC7・D5・D6・E6と集中する傾向がみられる。

113は羽口である。スラグも出土している。スラグはD5の層・D6の層からの出土である。

114は砥石である。4面とも使用されている。115は石臼である。上臼と考えられる。堀切1からの出土である。

116から118は近世陶磁器である。116は青磁染付の五寸皿である。内面には氷裂文に梅・松を描き、外面には宝文を描く。高台内には「福」銘が認められる。肥前産である。117は土師質土器の



小皿である。内面には型押による陽刻文様が認められる。いわゆる尾戸の白土器である。118は肥前系の丸形の中碗である。削り出し高台である。高台内は鋭角気味に深く削り出す。肥前系であり、尾戸窯産の可能性が高い。

Fig.35 近世陶磁器実測図

第 章 まとめ

(1) 出土遺物について

第 章で述べたように、今回の調査では古墳時代・古代・中世・近世の遺物が出土している。出土遺物の総点数は2,268点であり、うちわけはTab. 1 のとおりである¹。以下では各時代毎にみていく。

古墳時代

須恵器はD 6・E 5・E 6 グリッドにやや集中して分布する。当丘陵には岡豊山古墳の存在が知られている。また、香長平野をとりまく低丘陵は後期古墳が集中する地域であり、舟岩古墳群、高間原古墳群（高知市）等が築造されている。立地、出土遺物の組成から当調査区周辺に後期古墳が存在していた蓋然性が高い。

古代

土師器碗、白磁の碗（ ・ 類）が出土しており、これらの他にも白磁の四耳壺と考えられる破片が出土している。土師器碗はTR 4 層、白磁碗 類はH 5 層、 類はL 6 ・ 層からの出土である。僅かな出土量であり、ローリングを受けている資料があるなど、出土地点と積極的に関連付けることはできない。

奥谷南遺跡においても、当該期の遺物の出土が報告されており、山岳寺院に関連付けされている³。立地的にも類似しており、当調査区の性格付けを検討するうえで非常に重要である。

中世

土師質土器は全形が復原できるものが少なく、器種を細分することができないため、ここでは一括して供膳形態として扱う。出土比率では約72%を占める²。D 5・D 6・D 7・D 8・G 7・L 3 グリッドに多く出土する傾向がある。

瓦質土器は出土比率では約17%であり、比較的多くを占める。岡豊城跡の詰を中心とした調査⁴と比較しても多く、当調査区の特徴となっている。L 3 グリッドに圧倒的に集中する。礫集中 2 も

Tab. 1 器種別出土遺物点数

土師質土器					瓦質土器			備前焼				瀬戸美濃焼
供膳形態	鍋	鉢	火舎	不明	鍋	播鉢	不明	播鉢	甕	壺	不明	天目茶碗
1563	30	1	1	36	154	8	201	18	3	1	34	5
白磁						青磁						
碗	碗	碗	皿D	皿E	不明	四耳壺?	碗B 4	碗D	碗	稜花皿	皿	不明
2	1	3	1	4	4	1	3	9	6	3	1	7
青花				天目茶碗	四耳壺	土師器			鉄製品			
皿C	碗C	碗	不明			甕	碗	不明	釘	小刀	不明	
4	1	1	3	1	1	12	1	1	14	3	7	
スラグ	羽口	土錘	瓦	石製品		木製品	銅銭	須恵器				陶磁器
				砥石	石臼			壺	蓋	身	不明	
4	1	11	7	1	1	1	1	13	5	1	70	3

L3グリッドに含むと、約100点が出土している。鍋・播鉢・鉢などの器形があり、そのうち鍋の占める割合が非常に多い。

国産陶器は備前焼、瀬戸美濃焼である。備前焼は曲輪3で少量出土するが、C8グリッドにやや集中する傾向がある。備前焼は播鉢・甕・壺である。播鉢では 期～ 期にわたる資料が出土している。瀬戸美濃焼は天目茶碗であり、大窯期に位置づけられるものと考えられる。

貿易陶磁器は白磁・青磁・青花・天目茶碗などであり、これらすべてでもわずかに2%にすぎない。15世紀前葉～後葉にかけては青磁碗D類・稜花皿・白磁D類が該当し合計13点、15世紀後葉～16世紀前半にかけては青磁碗B4類・青花碗C群・青花皿C群が該当し合計3点、16世紀中葉～後半にかけては白磁皿E2群・青花皿2群が該当し合計8点である。細分不明な資料も多くあり、短絡的に15世紀前葉～後葉にピークを求めることはできない。

(2) 検出遺構について

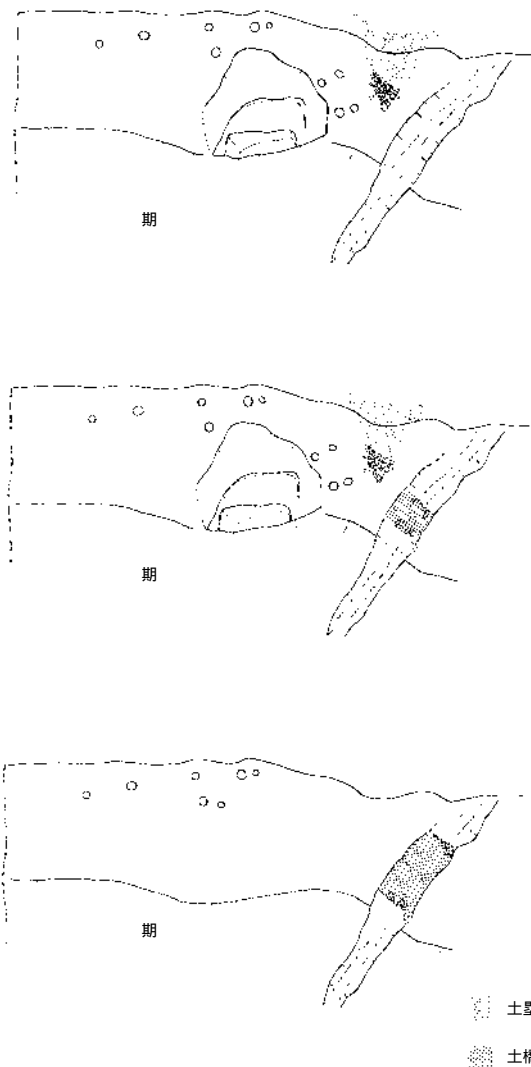


Fig.36 遺構変遷図

検出された遺構から変遷について考えてみたい。

堀切1と土橋の関係から少なくとも3時期に区別することができる。堀切1のみの段階、堀切1に土橋2が築造された時期、土橋2が拡張され土橋1が築造された時期である。ここでは便宜上、古い段階から 期、 期、 期とする。P1からP7はどの段階に伴うものかの根拠に乏しいため、全段階に含め、変遷図を作成した。

期

堀切1と縦堀2と掘立柱建物が存在していたものと推定される。縦堀2と掘立柱建物は機能的に有機的に結びついているものと考えられる。縦堀2は当然のことながら斜面の移動を妨げ、城内へむかうには必ず城門的施設をくぐらせるようになっている。

期

堀切 1 と土橋 2 と豎堀 2 と掘立柱建物が存在していたものと推定される。

期

土橋 1 が築造され、豎堀 2 は埋められたと考えられる。

以上、出土遺物の様相および遺構群の変遷をみてきたが、発掘調査成果から ~ 期の年代を決定することはむづかしい。中世に属する遺物では間壁編年 期の播鉢が最も古い段階のものであり、詰部の調査成果も考慮に入れ、 期は遅くとも15世紀代には機能していたと推定される。また、 期は最も新しい時期であり16世紀中葉から後半段階に比定できる。 期については時期決定できる要素がなく詳細は不明である。

註

1. すべて破片数でカウントした。細片では1cm四方前後を目安にカウントした。不明が多くを占める瓦質土器、備前焼、須恵器について若干述べると、瓦質土器では煤が付着しているものは鍋としてカウントした。煤の付着の認められない体部片は不明に含めたが、その大部分は鍋の破片であると推定される。備前焼については壺と推定されるものを少量含むが、その大半は甕の胴部片であると考えられる。須恵器では、不明の多くが壺あるいは甕の体部片であると考えられる。
2. この 中世の項では明らかに中世以外の時期であると考えられる須恵器・白磁碗（ ・ 類）・白磁四耳壺？・近世陶磁器を除外した総点数2,172点をもとに組成比率を再度計算した。
3. 松村信博・山本純代 2000 『奥谷南遺跡』 高知県文化財団埋蔵文化財センター
4. 松田直則・岡本桂典・森田尚宏 1990 『岡豊城跡』 高知県教育委員会
森田尚宏 1992 『岡豊城跡』 高知県埋蔵文化財センター

参考文献

- 間壁忠彦・葎子 1966~1968 「備前焼研究ノート」『倉敷考古館研究集報1・2・5号』倉敷考古館
- 小野敏正 1982 「15・16世紀の碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究vol.2』日本貿易陶磁研究会
- 上田秀夫 1982 「14~16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究vol.2』日本貿易陶磁研究会
- 森田 勉 1982 「14~16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究vol.2』日本貿易陶磁研究会
- 松田直則 1986 「6. 中~近世小結」『田村遺跡群』第10分冊高知県教育委員会
- 廣田典夫 1991 『土佐の須恵器』四国考古学叢書2
- 廣田佳久 1995 「高知の横穴式石室」『四国における横穴式石室の成立と展開』古代学協会四国支部第9回徳島大会資料
- 吉成承三 2000 「姫野々土居跡」高知県葉山村教育委員会
- 吉成承三 2000 「土佐の城郭出土の貿易陶磁」『城館出土の貿易陶磁』 日本貿易陶磁研究会

付 章

- 伝家老屋敷曲輪表採資料 -

伝家老屋敷曲輪にて土師質土器を表採したので、ここで報告する。曲輪の南端部において表採した。伝家老屋敷曲輪の詳細については、考察を参照されたい。

119・120は土師質土器である。119は扁平な底部から直線的に口縁部がのびる。ロク口成形である。底部外面には回転糸切り痕跡が残存する。内面はにぶい黄橙色、外面は明黄褐色を呈する。

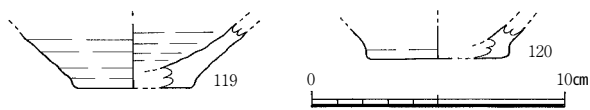


Fig.37 伝家老屋敷曲輪表採遺物実測図

第 章 考 察

岡豊城跡における縄張りの再検討

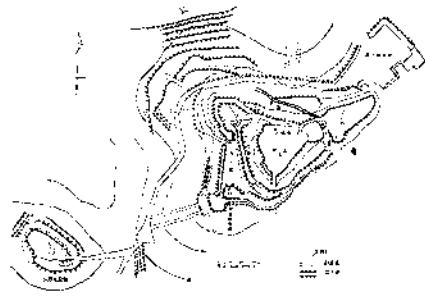
1) はじめに

長宗我部氏の本拠である岡豊城跡は、国立高知高等専門学校測量同好会や徳島県の本田昇氏によって作成された縄張り図で各曲輪などの遺構が語られていた。その後、史跡整備に伴い昭和60年度から発掘調査が行われ、はじめて岡豊城跡の解明が考古学的に行われた。その時作成された縄張り図では、詰西北部で畝状竪堀群や堀切・竪堀等が確認されており、四ノ段では枡形空間を持つ虎口なども特徴的な遺構として捉えられている。しかしこれまでの縄張り図では、詰や二ノ段から三ノ段までの各曲輪、伝厩跡曲輪など頂上部周辺の遺構しか描かれておらず、斜面部を含めた岡豊城跡全体が描かれた縄張り図とは言い難かった。これらのことから、これまで頂上部周辺の遺構しか描かれていない縄張り図で岡豊城跡が語られていた感がある。岡豊城跡が構築されている丘陵は、およそ40haの面積がある。これまでの縄張り図では、南斜面部やその他北斜面さらに伝厩跡曲輪の西側丘陵部などは不明のままであった。今回の発掘調査で検出された遺構を考える上で、丘陵南斜面部の遺構配置が重要であると考え、伝家老屋敷を中心に踏査しあらためて縄張り図を作成した。ここでは、発掘調査成果と併せて南斜面部の縄張り図をもとに岡豊城の姿を考えていきたい。

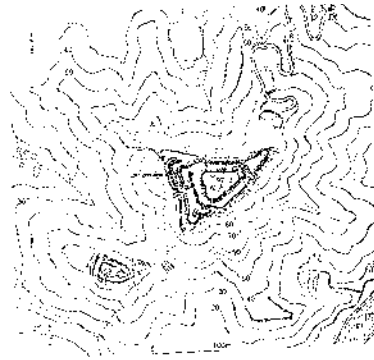
2) 岡豊城跡の縄張り調査の成果

岡豊城跡は長宗我部氏の居城として有名であるため、これまで何回か城郭調査が行われ縄張り図が作成されている（Fig.38）。まず、岡豊城跡の研究史として城郭調査の縄張り図の変遷を見ていくことにする。昭和54年に刊行された南国市史上巻と日本城郭体系15巻に、岡豊城跡の縄張り図が掲載されている。南国市史では、高知高等専門学校測量同好会作成による岡豊城実測図が掲載されている。この実測図では、本丸・二ノ丸・三ノ段・四ノ段の主郭の各曲輪と伝厩跡の曲輪が描かれている。この実測図は、正確に各曲輪が描かれており、主郭の北西部に位置する2重の堀切や斜面部の竪堀なども描かれている。しかし伝家老屋敷の曲輪は記載されておらず、斜面部までは縄張り調査が進んでいない。日本城郭体系15巻では、本田昇氏の縄張り図が掲載されている。本田氏作成の縄張り図では、通称伝家老屋敷の曲輪が記載されており岡豊城跡は3つの郭からなる山城と評価されている。

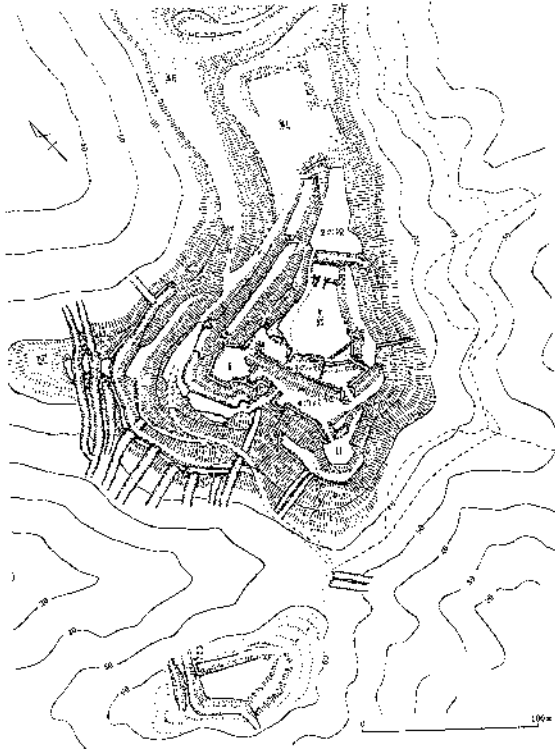
昭和62年に刊行された図説中世城郭事典第三巻では、池田誠氏作成の縄張り図がある。池田氏作成の縄張り図は、主郭を中心に伝厩跡も描かれている。主郭の西斜面部の畝状竪堀が描かれているが位置的な問題と、西北部の二重堀切と竪堀の関係が気にかかるところである。池田氏は、岡豊城の縄張り尾根上を二重の堀切と西斜面に7本の竪堀を築いている縄張り構造は、土佐で国内に多くみられるものとされ長宗我部氏の築城技術の特徴的なパターンと評価している。これら二重堀切と畝状竪堀群が長宗我部氏流構築技術ではないかとする指摘は、その後の土佐における縄張り調査



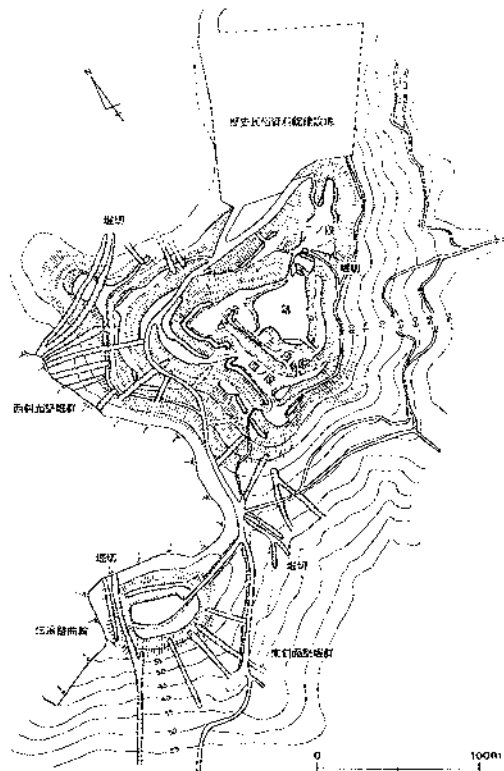
岡豊城跡実測図 (高知高専測量同好会作成)
参考文献 1 から



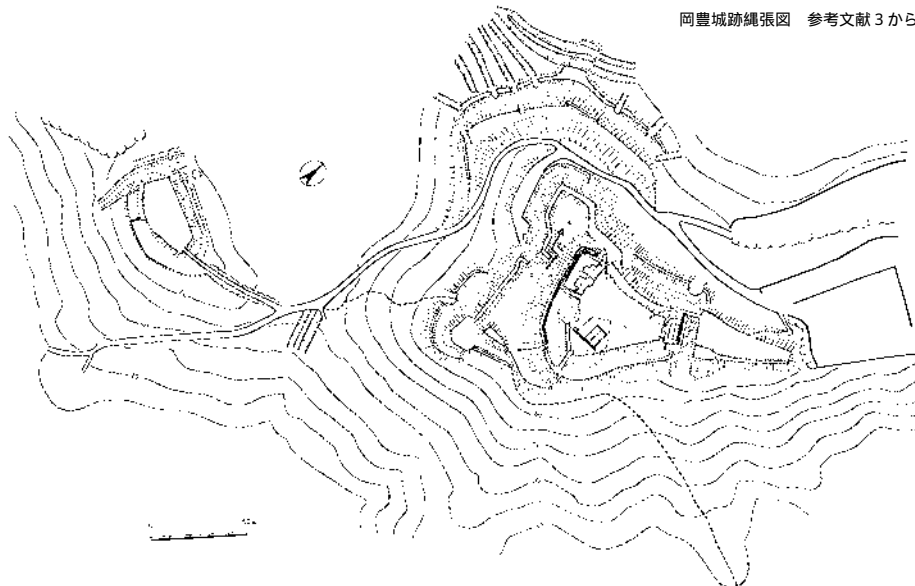
岡豊城要図 (本田昇氏原図)
参考文献 2 から



岡豊城図 (池田誠作図) 参考文献 4 から



岡豊城跡縄張り図 参考文献 3 から



岡豊城要図 (千田作図) 参考文献 5 から

Fig.38 岡豊城跡縄張り図の変遷

の一つの視点となっている。平成2年には、岡豊城跡第1～5次発掘調査報告書が刊行され発掘調査の成果とともに縄張り図が掲載された。高知県教育委員会が、これまでの縄張り図を参考に測量調査も実施し作成している。この縄張り図では、主郭の西斜面部竪堀群や西北部二重堀切の位置も正確で、伝厩跡曲輪の南斜面部竪堀も描かれている。しかし、丘陵全体における南斜面部の遺構は描かれておらず伝家老屋敷も縄張り図の中に記載されていない。平成3年には、国立歴史民族博物館研究報告に千田嘉博氏の岡豊城跡縄張り図が掲載されている。ここでは、詰で発掘調査された遺構の配置も記載されており特に四ノ段の食い違い虎口や、詰西北部の二重堀切や竪堀群などが正確に描かれてある。本田氏・池田氏・千田氏諸氏による城郭調査で作成された縄張り図では、斜面部も含めた全体的な縄張り図ではないが、主郭を中心に正確に描かれており個人の手による縄張り図としては評価されている。

3) 伝家老屋敷曲輪の再検討

岡豊城跡は、長宗我部氏の居城で高知県を代表する中世城郭である。標高97mを測る東西に長い孤立丘陵に構築されている。縄張りは、山頂部を主郭とし二ノ段から四ノ段までの階段式の曲輪が配置されている。さらに伝厩跡曲輪と伝家老屋敷曲輪の2箇所の副郭部からなる連立式の構造をもった城郭とされている。城郭の詰を中心とした曲輪には、比較的狭い地形の中に礎石建物跡を配置している。これらの礎石建物跡は瓦葺で、この建物が造られた時期は、出土した天正3年(1575)銘の瓦片から16世紀後半代であることは確実である。これまで岡豊城跡の姿は、頂上部の詰の建物を中心に三ノ段の建物と連動して防御の強い性格を持った山城のイメージであった。さらに二ノ段では、建物が検出されていないことから、兵だまりの空間として利用され、主に戦時下利用された城と考えられている。丘陵の南斜面は、家老屋敷が存在するのみで、自然の山林の景観を想定していた。

今回調査した地点は、伝家老屋敷曲輪に通じる出入口部にあたる。調査前の段階では、位置的な点から伝家老屋敷曲輪に伴う出入口部であろうことは想定できたが、明確な遺構は地表面の観察では確認できなかった。しかし試掘調査の結果、堀切や竪堀遺構の一部が確認でき、出土遺物も15世紀後半から16世紀後半までの約100年間にわたって使用された製品の破片が出土している。出入口部の検出遺構として、堀切・土塁・土橋・柱穴等が検出されている。

今回の調査で、伝家老屋敷曲輪の出入口部を検出したことから、伝家老屋敷曲輪の性格や岡豊城跡の中での位置づけを再検討する必要性がでてきた。伝承で家老屋敷とされているが、文献面でも確実に家老が住んでいた屋敷とは判明していない。そこで、伝家老屋敷曲輪周辺部の踏査をして縄張り調査を実施した。(Fig.39) 伝家老屋敷曲輪の周囲には、堀切や横堀さらには竪堀がめぐられ、防御性の強い曲輪で約2,700㎡以上の広さを持っていることがわかった。さらにこの伝家老屋敷曲輪の西側や東側丘陵でも、人工的に削平された平坦部が何力所も存在していることがわかった。しかし西側・東側丘陵部分では、防御のための堀切や竪堀は確認できなかった。これらのことから、伝家老屋敷曲輪は岡豊城跡の南斜面部のなかで最も防御された最も広い空間を持った重要な曲輪であったことがわかった。これらのことから、城主である長宗我部氏の屋敷の可能性も出てくること

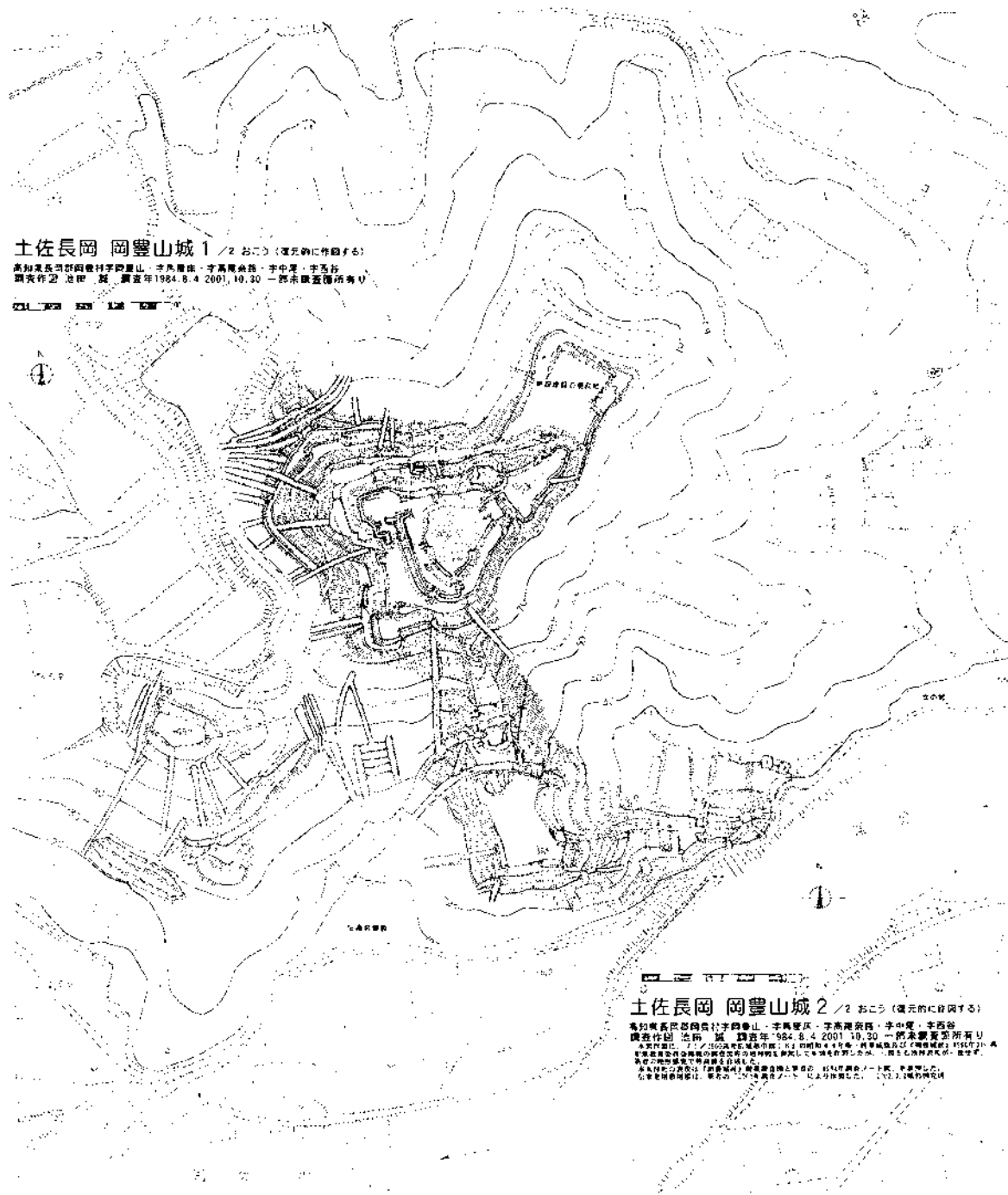


Fig.39 岡豊城跡縄張り図

から、今後伝家老屋敷曲輪の再検討をしていく必要がある。

4) 岡豊城跡出入口部から南斜面部の景観

現在岡豊城跡への登城口は、北側の国道33号線から入っている。当時の岡豊城の大手（表門）と搦手（裏門）がどこなのか、現地形の中では明確にその場所とルートがはっきりしない。南側斜面部において、出入口を想定すると今回の調査地点しか考えられない。また南側斜面の丘陵下には国分川が流れており、当時の重要な交通手段である川船を利用したことを考え合わせても今回の調査地点が適した場所になる。今回調査した出入口部から、伝家老屋敷曲輪を通過していくルートが南斜面部の中で、最短距離で頂上部の詰に行くことができる。当時は川船を利用してさまざまな物資が岡豊城に運ばれ、人々の往来も頻繁にあったと考えられ、大手口にあたる場所が今回の調査地点である可能性が強まってきた。土佐の国内外から岡豊城跡への流通等の交通手段として、外洋から浦戸湾に入り川船で国分川を遡るルートが利用されたと想定される。この国分川からみた岡豊城跡の景観を若干復元してみることにする。

国分川に最も突出した丘陵には、南斜面部で最も大規模な屋敷が数棟建ち並んでいたと考えられる。その前面には、堀切や竪堀の防御遺構が見えてくる。そして今回調査の結果から復元すると、出入口部には城門が構えられその脇には城番兵の見張りの性格を持つ建物が想定できる。伝家老屋敷曲輪とされる大規模な屋敷群の西側丘陵部分では、何段もの小規模な削平段が確認できることから、家臣団の屋敷が密集して存在していたと考えられる。東側丘陵では、西側と比較すると規模の大きい人工的削平地があることから重臣クラスの屋敷が想定できる。このように南斜面部を含めた岡豊城は、来城者が国分川方向から見ると建物群が密集した大規模な城郭として目に映ったと考えられる。

5) 中世から織豊期への岡豊城の変遷

岡豊城跡は、詰周辺の出土遺物からみても15世紀後半段階から機能していることがわかる。16世紀初頭には、有力国人連合に攻められ一度落城する記載が文献面で確認できる。詰でも礎石建物遺構に伴う石敷遺構の下面から焼土を確認しており、焼土下層では柱穴を確認している。これらのことから、焼土面は16世紀初頭の落城時の火災によるものと考えられ、それまでの遺構は掘立柱建物であった可能性が強い。その後礎石建物に変わる時期を明確にすることができないままになっている。しかし礎石建物と連結する切石遺構が検出されており、切石遺構の検出面から天正3年銘の瓦片が出土していることから、石敷遺構や礎石建物は天正3年頃には構築されていたと想定できる。これらのことから、詰の遺構も中世から織豊期にかけて大きく変わっていることがわかる。城跡の丘陵裾部である今回の調査地点でも15世紀代の遺物が出土しており、虎口部分もこの時期から機能していたことがわかる。伝家老屋敷曲輪が15世紀から機能していたかは、この地点の発掘調査を待たなければ明確には言えない。しかし今回の出入口部から遺物が出土していることを考えると、伝家老屋敷曲輪も15世紀から機能したとするのが妥当であろう。

土佐でも長宗我部氏が土佐を統一した天正3年までに、土佐の各在地に密着した小規模城郭や軍

事機能中心の砦などが淘汰され、拠点的な城郭に集約される現象が現れる。この集約された現象のひとつの結果として、土佐の中心的役割を果たす大拠点が必要となり安土城を手本とする城造りが岡豊城で行われたのではないかと考える。他地域でも、有力な戦国大名の拠点となる城は丘陵全体を総城郭化する例がある。例えば、中国地方を支配した毛利氏の居城である郡山城は、毛利元就段階で総城郭化し山城の中で生活をしていた。長宗我部氏も、土佐を統一した天正3年(1575)段階から岡豊城跡を大規模に普請しなおし、山頂部だけでなく丘陵全体を総城郭したのではないかと考えている。今回の調査から、出入口部分という小規模な調査ではあったが、今後伝家老屋敷曲輪の再検討やその他南斜面に構築された各曲輪群も考え合わせた岡豊城跡の姿を復元していく必要がある。さらに今回踏査できなかった北斜面部や、伝厩跡曲輪の西側丘陵部など広く縄張り調査が必要であると考え。今回は南丘陵先端部の狭い調査区ではあったが、岡豊城を見直す契機となったことなど大きな成果をあげることができた。

参考文献

- 1) 『日本城郭体系15巻』香川・徳島・高知 1979年 新人物往来社
- 2) 『南国市史』上巻 1979年 南国市
- 3) 『岡豊城跡第1～5次発掘調査報告書』 1990年 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 4) 『岡豊城跡 第6次発掘調査報告書』 1992年 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 5) 『図説 中世城郭事典』第三巻 1987年 新人物往来社
- 6) 前川要・千田嘉博・小島道裕「戦国城下町研究ノート」『国立歴史民族博物館研究報告』第32集 1991年
国立歴史民族博物館
- 7) 『描かれた郡山城展』吉田町歴史民族資料館秋の特別展図録6 1993年 吉田町歴史民族資料館
- 8) 千田嘉博『織豊系城郭の形成』 2000年 東京大学出版会
- 9) 中井均「織豊系城郭の画期」『中世城郭研究論集』 1990年 新人物往来社
- 10) 小林健太郎『戦国城下町の研究』 1985年 大明堂
- 11) 松田直則「土佐における虎口の出現とその展開」『織豊城郭』第6号 1999年 織豊期城郭研究会
- 12) 松田直則「土佐の中世城郭から織豊期城郭への変遷」『織豊城郭』創刊号 1994年 織豊期城郭研究会

遺物觀察表

土器・陶磁器

図版番号	器種	器形	グリッド	層位	法量 (cm)			色調			備考
					口径	器高	底径	内面	外面	断面	
1	土師質土器	小杯	D8		(6.7)	1.7	3.1	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ロクロ成形。
2	土師質土器	小杯	TR9		7.2	2.1	2.7	にぶい橙色	にぶい橙色	にぶい橙色	ロクロ成形。
3	土師質土器	小杯	H6		-	2.3	(4.6)	橙色	橙色	橙色	ロクロ成形。
4	土師質土器	小杯	-	表採	(10.4)	(2.2)	(5.9)	にぶい橙色	にぶい橙色	にぶい橙色	ロクロ成形。
5	土師質土器	皿	H7		-	-	-	にぶい橙色	にぶい橙色	にぶい黄橙色	手づくね成形
6	土師質土器	供膳具	D6		-	(1.4)	(3.2)	橙色	橙色	灰色	ロクロ成形。
7	土師質土器	供膳具	G7		-	-	(4.5)	橙色	にぶい橙色	暗灰黄色	ロクロ成形。
8	土師質土器	供膳具	TR4		-	-	(4.3)	橙色	にぶい橙色	灰色	ロクロ成形。
9	土師質土器	供膳具	-	P3	-	-	(4.9)	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ロクロ成形。
10	土師質土器	供膳具	D8		-	(1.4)	(3.8)	橙色	橙色	橙色	ロクロ成形。
11	土師質土器	供膳具	-	竪堀2	-	(1.7)	(3.9)	浅黄橙色	浅黄橙色	黄灰色	ロクロ成形。
12	土師質土器	供膳具	G7		-	-	4.0	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ロクロ成形。
13	土師質土器	供膳具	G7		-	-	(4.6)	にぶい黄橙色	橙色	にぶい黄橙色	ロクロ成形。
14	土師質土器	供膳具	L3		-	-	(4.4)	にぶい橙色	にぶい橙色	灰色	ロクロ成形。
15	土師質土器	供膳具	H5		-	(1.8)	(3.8)	橙色	橙色	灰色	ロクロ成形。
16	土師質土器	供膳具	G7		-	-	(4.8)	にぶい橙色	橙色	橙色	ロクロ成形。
17	土師質土器	供膳具	C8		-	(2.3)	(4.6)	橙色	橙色	橙色	ロクロ成形。
18	土師質土器	供膳具	C8		-	-	(4.0)	橙色	橙色	暗灰色	ロクロ成形。
19	土師質土器	供膳具	D7		-	(1.0)	(4.6)	にぶい橙色	にぶい橙色	にぶい橙色	ロクロ成形。
20	土師質土器	供膳具	TR4		-	-	(4.8)	橙色	にぶい橙色	橙色	ロクロ成形。
21	土師質土器	供膳具	C8		-	-	5.8	橙色	橙色	橙色	ロクロ成形。
22	土師質土器	供膳具	D5・6		-	(2.1)	(4.8)	にぶい橙色	にぶい橙色	にぶい橙色	ロクロ成形。
23	土師質土器	供膳具	D7		-	-	(6.0)	にぶい橙色	にぶい橙色	にぶい橙色	ロクロ成形。
24	土師質土器	供膳具	C7		-	(1.9)	(7.1)	にぶい橙色	にぶい橙色	灰色	ロクロ成形。
25	土師質土器	供膳具	J3		-	-	5.0	橙色	橙色	灰色	ロクロ成形。
26	土師質土器	供膳具	G7		-	-	(6.2)	橙色	橙色	にぶい黄橙色	ロクロ成形。
27	土師質土器	供膳具	D7		-	(1.9)	(8.0)	黄灰色	灰黄色	黄灰色	ロクロ成形。
28	土師質土器	供膳具	G7		-	-	(6.2)	橙色	橙色	にぶい黄橙色	ロクロ成形。
29	瓦質土器	鍋	C7		(18.7)	-	-	灰黄色	にぶい黄色	灰色	内外面ナデ。
30	瓦質土器	鍋	D7		(20.0)	-	-	黄灰色	灰色	灰白色	内外面ナデ。
31	瓦質土器	鍋	E6		(19.2)	-	-	にぶい黄色	にぶい黄色	灰白色	内外面ナデ。
32	瓦質土器	鍋	G7		(20.0)	-	-	にぶい黄橙色	暗灰色	灰白色	内外面ナデ。
33	瓦質土器	鍋	I6		(20.9)	(3.0)	-	灰色	灰色	灰色	内外面ナデ。
34	瓦質土器	鍋	J3		(22.8)	-	-	暗灰色	暗灰色	灰黄色	内外面ナデ。
35	瓦質土器	鍋	K2		(25.3)	-	-	にぶい黄色	にぶい黄色	灰色	内外面ナデ。
36	瓦質土器	播鉢	F6		-	-	-	灰黄色	灰黄色	黄灰色	内外面ナデ。
37	瓦質土器	不明品	K2 K3		(17.0)	-	-	灰白色	灰白色	灰色	内外面ナデ。
38	瓦質土器	不明品	L3		(21.8)	-	-	灰黄色	灰色	灰黄色	内外面ナデ。
39	備前焼	壺	-	竪堀2	-	-	-	暗灰黄色	暗灰黄色	暗灰黄色	ヨコナデ。
40	備前焼	甕	J3		-	-	-	灰褐色	灰色	にぶい橙色	ヨコナデ。
41	備前焼	播鉢	G7		-	-	-				ヨコナデ。
42	備前焼	播鉢	I5		(26.0)	-	-	褐灰色	褐灰色	にぶい赤褐色	ヨコナデ。
43	備前焼	播鉢	C7 D6 D7		(22.9)	(7.3)	-	灰赤色	灰褐色	灰褐色	ヨコナデ。
44	備前焼	播鉢	D8		(19.7)	-	-	にぶい赤褐色	褐灰色	灰褐色	ヨコナデ。
45	備前焼	播鉢	C8		(23.1)	-	-	灰赤色	灰赤色	灰赤色	ヨコナデ。
46	備前焼	播鉢	C8		(30.2)	-	-	赤灰色	赤灰色	黄灰色	ヨコナデ。
47	備前焼	播鉢	C8		(29.0)	-	-	褐灰色	灰褐色	褐灰色	ヨコナデ。

()内は復原値。

図版番号	器種	器形	グリッド	層位	法量 (cm)			色調			備考
					口径	器高	底径	内面	外面	断面	
48	備前焼	甕	E8		-	-	-	赤灰色	赤灰色	黄灰色	ヨコナデ。
			G7								
49	陶器	不明品	G7		(23.5)	-	-	浅黄色	浅黄色	浅黄色	
50	土師器	椀	TR4		-	-	(6.9)	浅黄色	浅黄色	灰白色	
51	瀬戸美濃	天目茶碗	D8		(11.6)	-	-	黒褐色	にぶい褐色	浅黄色	
52	土師質土器	鉢	L1		-	-	-	にぶい黄色	浅黄色	浅黄色	
53	土師質土器	鍋	J3		-	-	-	橙色	にぶい橙色	灰色	
54	土師器	甕	J7		-	-	-	橙色	橙色	橙色	
55	土師質土器	鍋	L3		(19.7)	-	-	橙色	明黄褐色	橙色	
56	土師質土器	鍋	C8		(40.3)	-	-	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	にぶい黄色	
57	土師質土器	鍋	D6		(29.0)	-	-	橙色	橙色	灰色	
58	土師質土器	火舎	G5	・	(25.8)	-	-	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	内面ハケ。外面ナデ。煤付着。
65	白磁	皿	E4		-	-	-	灰白色	灰白色	灰白色	E群。
66	白磁	碗	-	表採	15.2	-	-	灰白色	灰白色	灰白色	類。
67	白磁	碗	H5		-	-	-	灰白色	灰白色	灰白色	類。
68	白磁	皿	TR8セク	-	-	-	(3.3)	灰白色	灰白色	にぶい黄褐色	D群。
69	白磁	碗	L6	・	-	-	(5.3)	灰白色	灰白色	灰白色	類。
70	白磁	皿	E6		-	-	(6.2)	灰白色	灰白色	灰白色	E2群。砂目。
71	白磁	皿	D7		-	-	(6.2)	灰白色	灰白色	灰白色	E2群。砂目。
72	青磁	碗	D6		-	-	-	オリーブ灰色	オリーブ灰色	灰白色	
73	青磁	碗	G5	・	-	-	-	オリーブ灰色	オリーブ灰色	灰白色	
74	青磁	碗	D6		-	-	-	オリーブ灰色	オリーブ灰色	灰白色	B4類。
75	青磁	碗	H5		-	-	-	オリーブ灰色	オリーブ灰色	灰黄色	B4類。
76	青磁	碗	H4		-	-	-	オリーブ灰色	オリーブ灰色	灰黄色	D類。
77	青磁	碗	C8		(15.8)	-	-	灰色	灰色	灰色	D類。
78	青磁	稜花皿	I7		-	-	-	暗オリーブ色	暗オリーブ色	灰白色	
79	青磁	皿	E5		(8.4)	-	-	暗オリーブ色	暗オリーブ色	灰白色	
80	青磁	碗	D8	・	-	-	(5.5)	灰黄色	黄灰色	灰黄褐色	B4類。
81	青花	皿	TR8		-	-	-	浅黄色	浅黄色	浅黄色	C群。粗製。
82	青花	皿	C7	・	-	-	-	明緑灰色	明緑灰色	灰白色	C群。
83	青花	皿	TR11		(10.0)	-	-	灰色	灰色	浅黄色	C群。粗製。
84	青花	碗	D6		-	-	-	明緑灰色	明緑灰色	灰白色	C群。外面：波濤文
85	青花	皿	TR8		-	-	(3.6)	浅黄色	浅黄色	淡黄色	C群。粗製。胎土目あり。内面：花文。
86	青花	碗	D8		-	-	4.6	灰白色	灰白色	にぶい黄褐色	C群。粗製。内面：列点文。
87	中国産	壺	D5		-	-	-	灰色	黒褐色	黄灰色	
88	中国産	天目茶碗	D6		-	-	(3.0)	黒色	灰黄色	灰色	
89	須恵器	杯蓋	-	豎堀2	-	-	-	灰色	灰色	灰白色	回転ナデ。
90	須恵器	杯身	E6		-	-	-	黄灰色	灰色	灰色	回転ナデ。
91	須恵器	壺	D8		-	-	-	灰色	灰色	灰色	
92	須恵器	甕か壺	E5		-	-	-	灰色	灰白色	灰白色	
93	須恵器	壺	C7		-	-	-	灰色	灰色	灰色	
			D8								
			F7								
94	須恵器	壺	F5	堀切1	-	-	(9.7)	灰白色	灰白色	灰白色	回転糸切り。
95	須恵器	壺	E5		-	-	-	灰色	灰色	灰褐色	
116	磁器	五寸皿	K6		(13.5)	4.6	-	-	-	-	肥前産
117	土師質土器	皿	J6		(11.6)	(2.3)	(5.6)	灰黄色	灰黄色	灰白色	尾戸窯産
118	陶器	碗	J6		(12.3)	8.7	4.8	にぶい黄色	にぶい黄色	にぶい黄褐色	肥前系
119	土師質土器	供膳具	-	表採	-	-	(4.6)	にぶい黄褐色	明黄褐色	にぶい黄褐色	
120	土師質土器	供膳具	-	表採	-	-	(5.4)	明黄褐色	明黄褐色	灰色	

()内は復原値。

土製品

図版番号	器種	器形	グリッド	層位	法量 (cm)			色調			備考
					全長	全幅	全厚	内面	外面	断面	
59	土製品	土錘	I5		4.5	1.2	0.8	-	暗灰黄色	暗灰色	
60	土製品	土錘	-	竪堀2	3.8	1.3	1.2	-	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	
61	土製品	土錘	I6		4.9	1.2	1.1	-	にぶい赤褐色	灰色	
62	土製品	土錘	C7		5.0	1.3	1.1	-	橙色	灰色	
63	土製品	土錘	表採	-	-	1.6	1.3	にぶい橙色	-	黄褐色	
64	土製品	土錘	-	竪堀1	-	1.6	1.3	-	橙色	にぶい橙色	
113	土製品	羽口	TR4		-	-	-	-	浅黄色	橙色	

瓦

図版番号	器種	器形	グリッド	層位	法量 (cm)			色調			備考
					全長	全幅	全厚	内面	外面	断面	
112	瓦	瓦	E6		-	-	2.1	灰黄色	灰色	灰白色	

鉄製品

図版番号	器種	器形	グリッド	層位	法量 (cm)			備考
					全長	全幅	全厚	
98	鉄製品	釘	L3		2.7	0.8	0.6	
99	鉄製品	釘	D5・6		-	0.9	0.5	
100	鉄製品	釘	L3		-	1.0	0.8	
101	鉄製品	釘	D5・6		-	0.5	0.5	
102	鉄製品	釘	D5・6		-	0.5	0.5	
103	鉄製品	釘	K2		-	-	-	
104	鉄製品	釘	D5	竪堀2	-	2.0	0.9	
105	鉄製品	釘	-	表採	-	-	-	
106	鉄製品	釘	I6		6.8	0.7	0.7	10.9g
107	鉄製品	釘	H3		6.5	1.9	0.8	混入の可能性あり。
108	鉄製品	小刀	-	P3	-	-	0.5	
109	鉄製品	小刀	F6		-	-	0.8	
110	鉄製品	不明品	L3	・	5.5	1.2	0.3	
111	鉄製品	不明品	J3	・	5.1	2.5	0.7	混入の可能性あり。

青銅製品

図版番号	器種	器形	グリッド	層位	法量 (cm)			備考
					口径	器高	底径	
97	青銅製品	銅銭	-	礫集中4	-	-	-	模鑄銭。

石製品

図版番号	器種	器形	グリッド	層位	法量 (cm)			備考
					全長	全幅	全厚	
114	石製品	砥石	I2		(9.0)	3.25	3.3	224.6g
115	石製品	上臼	F4	堀切1	-	-	-	-

木製品

図版番号	器種	器形	グリッド	層位	備考
96	木製品	櫛	J2		

写真図版



調査区遠景



調査区近景



調査前風景



曲輪3 完掘状況



曲輪1 掘立柱建物 ・ 竪堀2 完掘状況



曲輪1 P3・P4 完掘状況



土橋1 検出状況



土橋1・2 南面状況



土橋2 検出状況



土橋2 北面状況

PL6



堀切 1 完掘状況



堀切 1 完掘状況



堀切1 bb'セクション



曲輪1 礫集中1 検出状況



豎堀 1 完掘状況



石列 1 検出状況



段状遺構検出状況



曲輪3 焼土跡検出状況

P L 10



横堀完掘状況



横堀セクション



石垣 2 検出状況



礫集中検出状況



P 3 完掘状況



P 6 完掘状況



土師質鍋出土状況



土師質土器出土状況





P L 14



47 (外面)



47 (内面)



47 (外面)



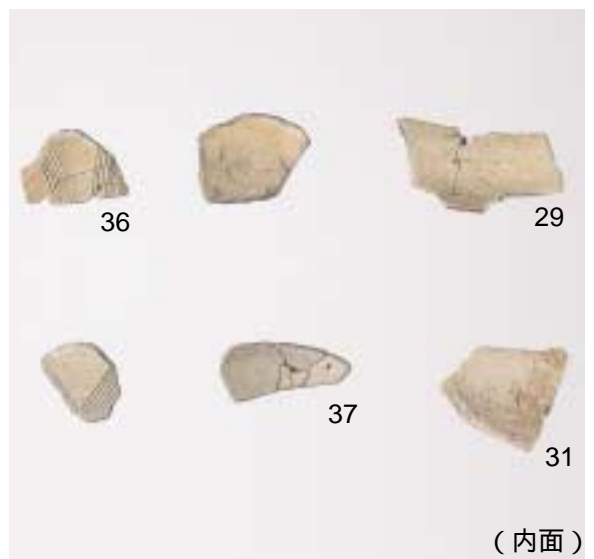
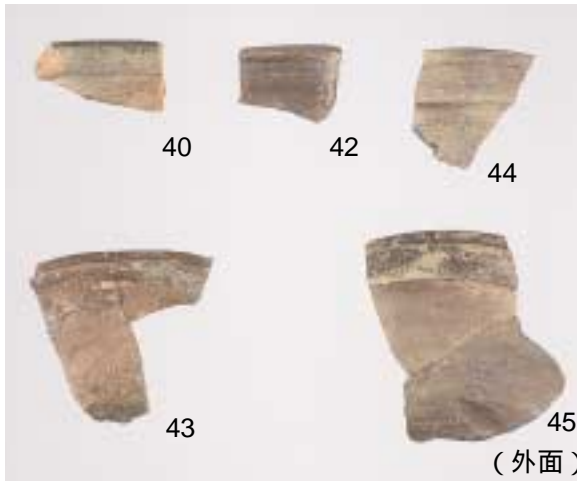
47 (内面)



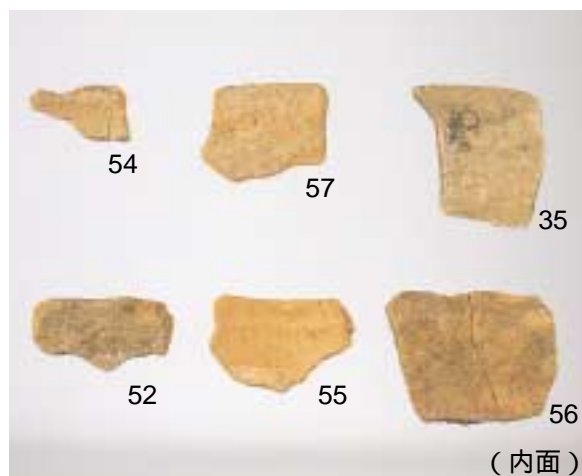
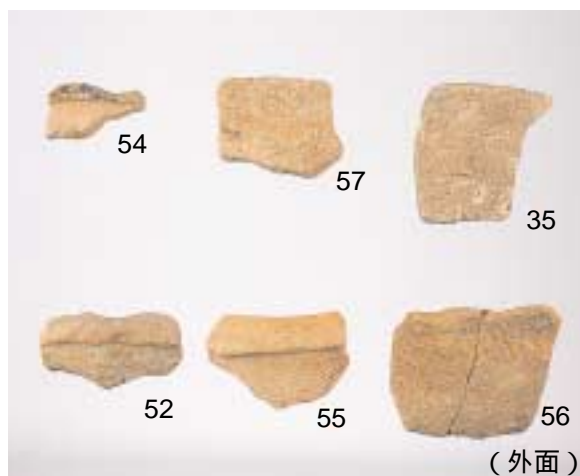
47 (外面)

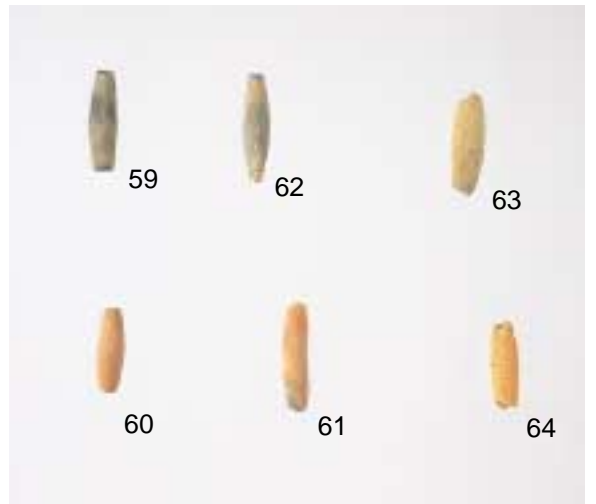
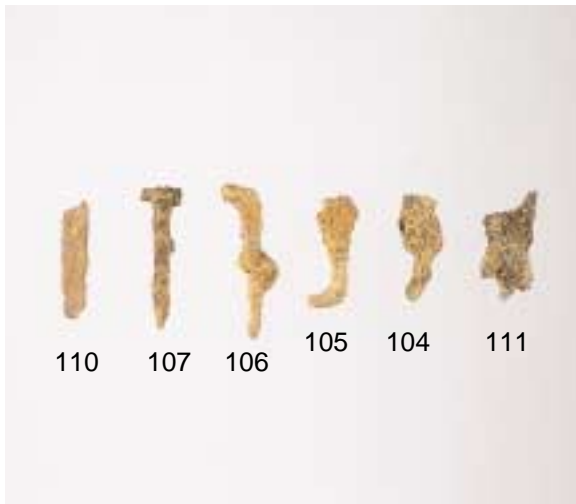
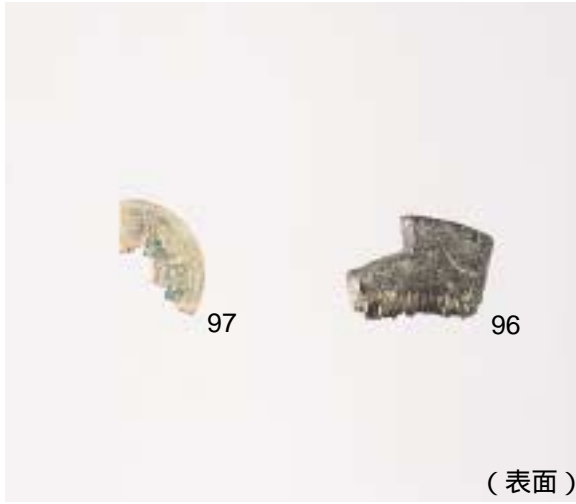


47 (内面)



P L 16





報告書抄録

ふりがな	おこうじょうせき							
書名	岡豊城跡							
副書名	国分川激甚災害緊急対策に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第74集							
編著者名	松田直則・今田充・久家隆芳							
編集機関	(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター							
所在地	高知県南国市篠原1437 - 1 TEL 088 - 864 - 0671							
発行年月日	2002年6月30日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °	東経 °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おこうじょうせき 岡豊城跡	こうちけん 高知県 なんこくし おこう 南国市岡豊	39204	040084	33° 35 24	133° 37 37	平成12年12月18日~ 平成13年3月8日	約90m ²	国分川激甚 災害緊急対 策に伴う発 掘調査
						平成13年7月25日~ 平成13年11月25日	約1300m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
岡豊城跡	古墳?	古墳時代		須恵器		周辺に古墳が存在した可能性がある。		
	散布地	古代		土師器・須恵器・ 貿易陶磁器		白磁碗、類が出土。		
	城館跡	中世	曲輪・堀切・ 土橋・柱穴・ 立堀・横堀	土師質土器・貿 易陶磁器・備前 焼		検出遺構から少なく とも3段階に変遷す る。		
	散布地	近世		陶磁器		尾戸焼の白土器皿が 出土。		

岡豊城跡

2002年

編集 高知県文化財団埋蔵文化財センター

発行 高知県南国市篠原1437 - 1

電話 (088) 864 - 0671

印刷 (有)西村謄写堂